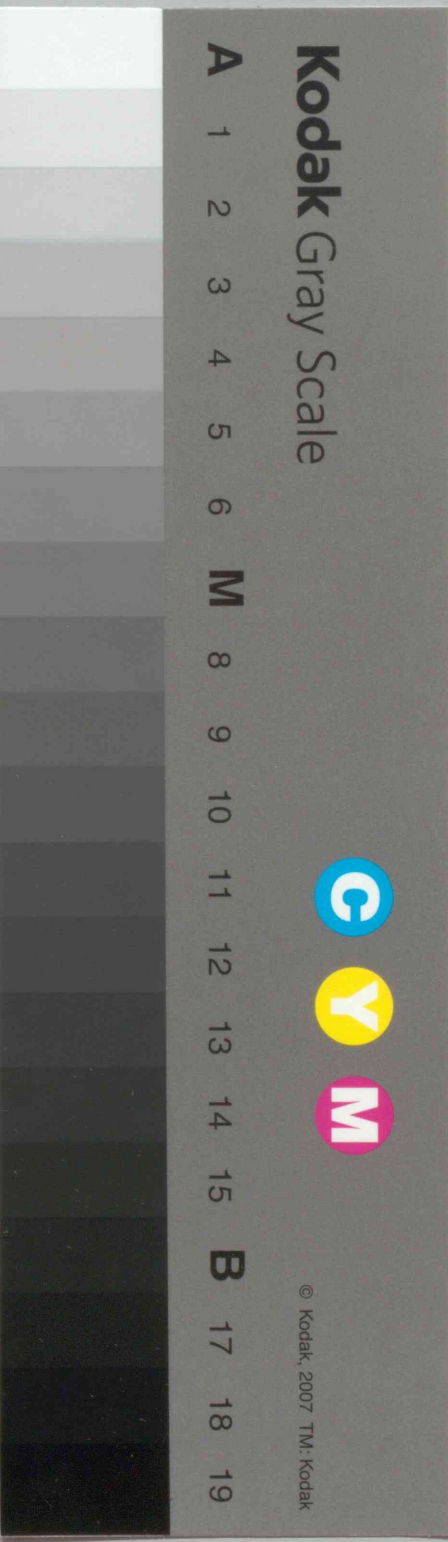
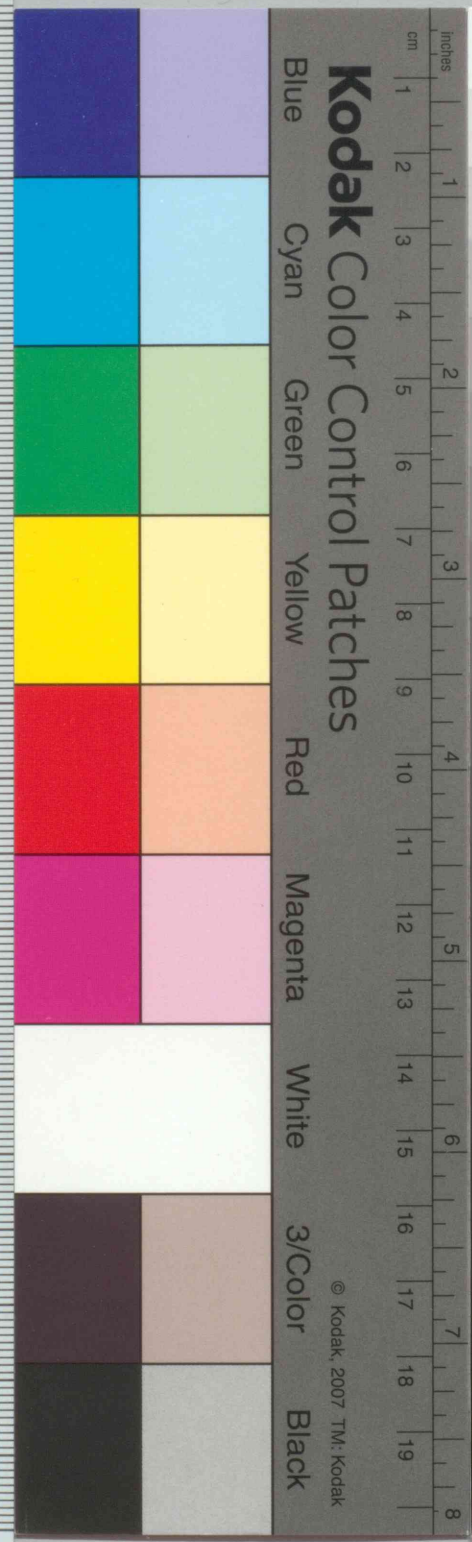


改制中等新國文卷七

375.9
Mi20
資料室



41774
教科書文庫
4
810
41-1935
20000
53198

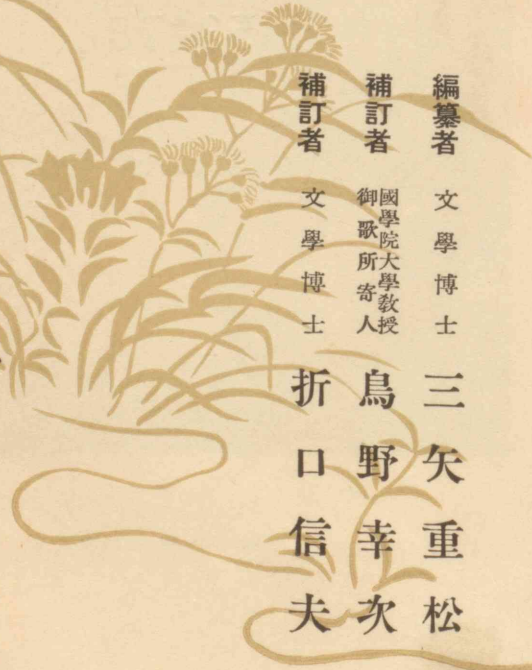
資 料 室

濟 定 檢 省 部 文

書 科 教 科 文 漢 語 國 校 學 中 日 九 十 二 月 十 年 十 和 昭
科 語 國 校 學 業 實

375.9
Mizuo

改 制 中 等 新 國 文



編纂者	文學博士	三矢重松
補訂者	國學院大學教授 御歌所寄人	鳥野幸次
補訂者	文學博士	折口信夫

社 會 式 株

社 學 文



〔照參課八第〕

行西の路和大

(筆巳正田岩)



例言

一 本讀本は、國語教育が擔へる重大なる使命に鑑み、國家的精神の昂揚と、民族の自覺の上に、大いに裨益せんとするを以て、教材選擇の主眼とす。

一 本讀本は、現代文を中心とし、各時代の各種の文體に互りてその代表的作品を網羅し、學年の程度に應じて配列を鹽梅し、以て國語常識涵養の徹底を期す。

目次 (卷七)

一 明浄直……………五十嵐 力……………四

二 奈良の春……………笹川 臨風……………二七

三 花のさだめ……………本居 宣長……………五

四 ちらが春……………小林 一茶……………二六

五 旅人芭蕉……………萩原井泉水……………三

六 奥の細道……………松尾 芭蕉……………四

七 七寶の柱……………泉 鏡花……………五

八 自然詩人……………土居 光知……………六

九 自然の愛……………藤岡作太郎……………七

一〇 折節のうつりかはり……………吉田 兼好……………八

二 流泉・啄木……………(今昔物語)……………三

三 今 様……………七

一三 平安朝時代の郊外……………佐々 政一……………九

一四 新緑の印象……………田部 重治……………九

一五 雨の興……………松平 定信……………二〇

一六 海 邊……………中島 廣足……………二〇

一七 芳流閣……………瀧澤 馬琴……………二二

一八 膏藥煉……………(續狂言記)……………二六

一九 狂文二篇……………島木 赤彦……………二六

二〇 民謡の話……………藤井 乙男……………二六

二一 諺……………小泉 八雲……………二八

二二 文學と人生……………(古今著聞集)……………二八

二三 昔ものがたり 上……………(十訓抄)……………二八

二四 昔ものがたり 下……………田中 寛一……………二八

二五 日本民族の覺悟……………(十訓抄)……………二八

附録 國文學の系列と作品・解釋法大要

として排斥するといふ傾があつた。天照大御神は、鏡を齋きて我が大御前を見るが如くせよと仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齋かれてある。詔勅や祝詞や君臣應對の詞などに「明き心」といふ語が澤山に用ゐられて居る。これ等はいづれも、此の性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據になると思ふ。我が國民の中庸性、折衷性、調和性も一面此の根本性質の結果であらう。我が國には政治・社會・宗教等の諸方面に互つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突が無い。無いではないが割合に少く、またいつもよい加減に切上げて調和するといふ傾がある。例へば、異主義が新たに外國から入つて來る。毛色が變つて居るので、暫くは争ふが、やがて御互に道理もあり、無理もあることがわかる。馬鹿らしくて争論がつゞけられなくなる。そこで

天照大御神は鏡を齋きて云々
古事記上卷の大御神が三種の神器を皇孫瓊々杵尊に授け給ふ條に、「この鏡は吾、我が御魂と爲して我が前を拜くが如伊弉岐まつれ云々」と詔りたまひき」と見ゆ。
 祝詞 第一六頁參照。
 君臣應對の詞 詔勅・宣命と、臣下より奉る上表文等に見ゆる詞。

騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして長短取舍の調停をする。萬事此の通りである。先づ儒教が入つて來た。至つて尤もらしい事をいふから、早速傭聘して我が固有の倫常に理窟をつけて貰ふ。かくて儒教は長へに我が國風の忠實なる辯護人となつた。佛教が入つて來た。餘りに奇怪なので暫く押問答がある。やがて説き方の巧妙なのに打込むと、何等の芥蒂なく、中心から歸依してしまふ。至尊の御身を以てさへ、自ら三寶の奴と名乗らせらるゝやうになる。けれども、天位の妖僧に歸するを見ては、さすがに黙つては居ぬ。かくて遂に兩部習合といふ恠巧な調和案が成りたつた。武家の世になつては佛敎を餘興扱ひして、老後の慰め、助命の口實とするやうになつた。徳川時代になつては、禪の修行に武士ほど都合よきものはなしなどと、釋迦如來の夢にも見ぬ調和説をと

至尊の御身を以て云々 孝
謙天皇のことを申す。深く佛法に歸依し、在位十年、淳仁天皇に御讓位、尼となりて法基尼と申す。
 兩部習合 眞言宗の教理を以て神道を解釋したるもの。兩部習合の稱は眞言密敎の金剛・胎藏兩部の教理によりて神道を説明したるに起る。僧空海の唱道なるも徳川時代に吉田兼俱等によつて定めらるるべしといふ。
 禪の修行に云々 澤庵禪師(一三三三-一三〇五)のこと。徳川家光の頃の僧にて、不動智神妙録を著

ふ趣に似て居る。汚穢混濁を忌むことは清明共に同様であるが、清はそれ以上に味ひあり、濫かみあることを要する。たとへば、鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すを要とせずして、温潤の光圓融の相、澄徹の趣あることを要するが如きものである。本来日本人は明かに事物を看る長所があるのみならず、外物を看るにも自己を發表するにも、一種の味ひある態度を具へて居た。其の明は空白の明ではなくして、温潤圓融澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶・夜光珠の明である。我が國には古來襖・被^カが廣く行はれ、且重要視されて居た。祝詞・宣命をはじめとして多くの歌詠・諷謠は、明き心を現しながら、趣味風韻に富んで居た。しかも其の趣味や形容が諸外國例へば支那の文學に見るごとき張子の虎のやうな誇張

襖・被 「襖」は身に罪穢ある時、水邊に赴きて水にて身を淨むる行事。「被」は神に祈りて災穢を除く行事。

の弊がなく、よく其の實を現し、中味に相應はしい修飾を纏うて居る。むくつけき武人にも、戦陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は胄に香を焼きしめるといふやうな嗜みがあった。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それぞれ相應はしい文學をもつて居る。外國出稼ぎの労働者が其の日の生活に窮しながらも、猶一二の植木鉢を持たぬはなく、しかしてこれは外國の労働者に絶えて見ぬ所といはれて居る。大工・指物屋の手に成る、はかなき家具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えぬ裏面まで手を盡くすといふ嗜みがあるといはれる。是等は孰れも大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではないか。吾等は日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至るまで皆美術を愛翫す」と

戦陣の間に云々 生田森の戦に、梶原景時は梅花一枝を胡箆にそへて挿す。平家の諸將その風流を稱す。

歌詠を贈答し 前九年の役に源義家は、安倍貞任が奥州衣川に敗れて逃ぐるを追ひ、「衣のたてはほころびにけり」と詠みかけたれば、貞任直ちに「年を経し絲のみだれの苦しさに」と答へける故、義家は、その風雅に免じ、射るを止めて歸る。

胄に香を云々 大阪夏陣に、木村重成は豫め死を決し、髪を洗ひ香を胄にたきしめて出陣せり。

いうた一外人の批評が、必ずしも虚妄でないと思ふ。

直は正を意味し、勇を意味し、決断を意味し、直前直往を意味する。其の厭ふ所は躊躇、緩慢、首鼠兩端である。曲ること、拗ること、邪なることである。叢雲の劍は其の標章として、此の上なく相應はしい。元來、直の徳の本領は心の明かに見たところに向つて直前するにある。若し右の三徳を一括してこれを一體と見れば、明は其の靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明かに見たるところをば、意が直進して實現する。而して知の見方、意の働き方に、潔くして、言ひ知らぬ味ひのあるのが、邦人固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て、父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし愛し。故にその明き心の示すところ所に従ひ、直前して父母に事へ、妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅知し大君現

父母を見れば云々、萬葉集に「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐしうつくし（山上憶良）」
八隅知し大君、古事記に「高光る日のみこ安みし、我が大君」

つ神」として國に臨み給ふさまが限りなく高く貴い。故に直前して、「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」の獻身的奉公を致す。此の通りである。而して其の君父に事へ、妻子を愛するや、多くは水臭い思慮、分別、利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。此處が眞淵、宣長等の國學者が感歎し、自負して措かなかつた所である。無論何處の國にも、文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の所があつたであらう。又日本民族にも、利害勘定の行爲が無かつたといはれぬであらう。又自然、直實の行爲に弊害が伴はぬともいはれぬであらう。けれども、我が民族の特長の一面は、兎に角此處に在つたやうに思はれる。其の例は遠い昔では須佐男命、勝ちすさんでは前後を顧みず、皇祖に存分のいたづらして高天の原を震動される。罪さるれば命を畏みて邊土に行

海行かば云々、萬葉集に「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君のへこそ死なめ、かへりみはせし」（大伴家持）

眞淵 賀茂氏。國學者。遠江の人。荷田春滿の門人。田安宗武に仕ふ。明和六年歿、年七十三。（二三五七―二四二九）

宣長 本居氏。醫者・國學者。伊勢松坂の人。紀伊侯に仕ふ。享和元年歿、年七十二。（二三九〇―二四六一）

須佐男命 伊弉諾尊の御子。天照大御神の御弟。本文の説話、古事記上巻に出づ。

皇祖 天照大御神。

かれる。出雲では櫛名田姫の不幸を見て、危険をも顧みず、直ちに八俣の大蛇を退治される。寶劍を得ると、これを先に敵たうた天照大御神に上られる。行り方がいかにもはき／＼として、直斷決の文字そのまゝのやうではないか。次いで倭武尊、兄君を搦み批いで、手足を引つ闕いて、薦に裏んで投げ棄てるといふ亂暴者でありながら、一たび詔を承れば、劍に仗り、千里を獨往して東西の兇賊を平げられた。これ亦須佐男命系統の勇者である。それについては、鎮西八郎爲朝が、腕白勸當九國押領召還保元の勇戦、大島配流の一生、これも須佐男系の大立者。是等はいづれも向う見ずの亂暴者でありながら、妙に情に厚い所があり、君父の事とあれば水火も辞せず、直前するといふ風がある。直斷決勇の權化で、たしかに大和民族固有性の一面を脊負つて立つヒーローで

倭武尊 景行天皇の皇子日本武尊。本文の説話、古事記中巻に出づ。

ヒーロー Hero, 英雄。

ある。其の他、蒙古の來寇に西海の將士が身命を棄てて防戦した態度を見よ。代々の武士が、

千萬の軍なりとも言擧げせず取りて來ぬべき男と

ぞおもふ (萬葉集)

斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠・加藤清正の如き竹を割つたやうに正直な豪傑の、國民に尊崇さるゝを見よ。曾我の五郎朝比奈三郎のごとき一徹者の、國民に愛さるゝを見よ。豁然大悟の禪宗が盛に行はれたるを見よ。おつと出せば、やつと受ける金平淨瑠璃の流行した趣を見よ。眞偽は知らねど、正直は一旦の依怙に非ずと雖も終に日月のあはれみを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も必ず神明の罰にあたる。といふ戒が、天照大御神の御言として、神道家に唱へられて居た。武士は「七息思案」といふ格言があつて、分別も久しくすれば

千萬の云々 高橋蟲麿の詩萬葉集に出づ。

朝比奈三郎 名は義秀。和田義盛の子。勇武多力な以て聞ゆ。

金平淨瑠璃 淨瑠璃節の一。櫻井和泉太夫の創めしもの。この派にて語るものは、必ず坂田金時の子金平を主人公とし、それが稀代の力量を有して、到る處に悪鬼や妖怪を退治すること筋とす。曲節も豪壯にして、元祿以前の江戸に流行せり。
正直は云々 山本常朝著の葉隠(俗に佐賀論語)の中にある詞。

ねまる、武士は物事手取早にするものぞといふことが、武士道の金戒になつて居た。是等はいづれも直きを好む性質が、大和民族の基本精髓を成して居る證據である。

—新國文學史—

辭別きて伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく皇神の見霽るかします四方の國は天の壁立つ極み國の退立つ限り青雲の霞く極み白雲の墜坐向伏す限り青海原は棹柁干さず舟の艦の至り留る極み大海原に舟滿て續けて陸より往く道は、荷の緒縛堅めて磐根木根履みさくみて馬の爪の至り留る限り長道間なく立て續けて狭き國は廣く峻しき國は平けく遠き國は八十綱打掛けて引寄することの如く皇大御神の寄さしまつらば荷前は皇大御神の大前に横山の如く打積み置きて、残をば平けく開召さむまた皇御孫命の御世を、手長の御世と堅磐に常磐に齋ひまつり茂し御世に幸へまつるが故に、皇吾が陸神漏伎神漏彌命と、鷲じもの頸根衝抜きて、皇御孫命の珍の幣帛を稱辭竟へまつらくと宣る (延喜式、祝詞)

見續るかし云々 天照大神は日の神にまします故に、高天原より遠く國土を見渡し給ふなり。

荷前 貢物のいつもの。

手長の御世と云々 「た」は接頭語。堅磐は堅き岩、常磐は長へに變らぬ岩。

皇吾が陸云々 天皇の親しき皇祖神と稱へ奉りて、鷲の如く頸を前につき出し垂れて神を敬ふなり。

珍の幣帛を云々 珍の幣帛を奉り置きて、善言美辭を盡くして神徳を稱讚し奉れと、中臣氏がそこに集れる神主・祝部等にこの祝詞を宣り聞かするなり。

祝詞 神前にて朗讀する祭文。年を経るに従つて形式一定す。純粹なる國文か漢字の音訓を以て書きたるもの。その修辭は對句・疊句・冠辭・比喻法・擬人法等を多く用ひ、雄渾正大の氣に富む。



二月 堂

二 奈良の春

笹川 臨風

四季の風景中、奈良が格段すぐれて居るのは春である。奈良の旅籠屋、三輪の茶屋には、東風がそよ／＼と暖簾を吹いてゐる。河内の山々には霞がたなびいて、麥秀づること五六寸菜の花は限りなく黄金色の浪を打ち、その間を紫雲英の紅が交織に彩られてゐる。告天子の聲は遠近に悠揚と響き、行く手の方には畝傍、耳無、香具山が朧に淡い。春の大和路はまことに長閑である。大宮人は春日野の烽火の野守に若菜の摘み頃を尋ねた。げに「咲く花の匂ふが如く」と謳はれた。奈良の都は、春日熙々たる情景に溢れてゐた。猿澤の池水が温んで衣掛柳の芽が青くふくらんだ時、奈良見物の旅人はぞろ／＼と奈良驛で下りる。春日から大佛

笹川臨風 名は種郎。明治

三年東京市に生る。文學博士。歴史家。國文學者。東洋大學、駒澤大學教授。

三輪 奈良市の東南約十二軒、奈良縣磯城郡にある町。

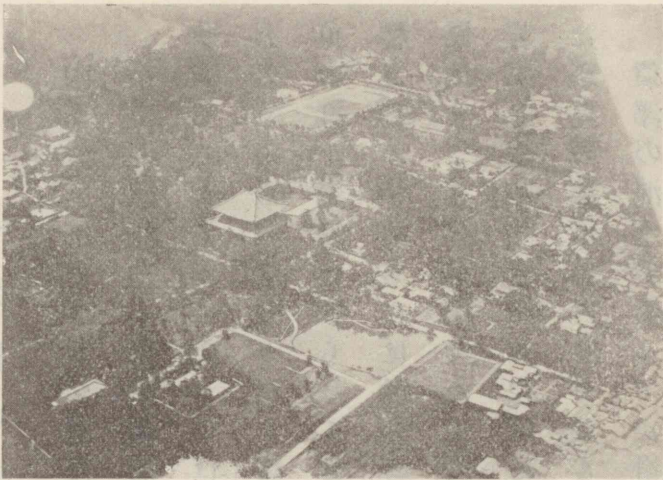
春日野の云々 古今集に

「春日野の飛火の野守出て見よ今いくかありて若菜つみてん。」と。

咲く花の云々 萬葉集に「あなによし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今さかりなり」と。

猿澤池 奈良市興福寺の南にある池。率川（イサカハ）の水を湛ふ。

へかけて、土産物を賣る店々の呼び聲にも自ら春風が吹いてゐる。紅に青に金色に彩られた奈良人形は、春にふさはしく美しい。蕨餅、火打餅の皿の上にも、落花の一片二片が飛んで来よう。芭蕉は「奈良七重七堂伽藍八重櫻」と吟じ、一茶は「大佛の鼻からぬける燕かな」と詠じ、其角は「菜の花の中に城あり郡山」と詠み、蓼太は「菜の花に長閑き大和河内かな」と興じてゐる。實に奈良大和路は春の世界である。



春日の巫女とは、その名を聞くだに春らしい感じがする。

芭蕉 松尾氏。元祿俳壇の巨匠。伊賀の人。元祿七年（一三五四）歿、年五十一。

挿繪 奈良市（中央の建物は大佛寺）

其角 榎本氏。江戸の俳人。芭蕉門下の高弟。寶永四年（一三六七）歿、年四十七。

蓼太 大島氏。信濃の人。江戸に出て、俳人となる。天明七年（二四四七）歿、年八十。

春日の巫女 春日神社にゐる巫女。

二月堂 東大寺に屬し、當山最古の建物。

三月堂 二月堂の前面にあり、東大寺に屬する法華堂。

若草山 東大寺の東にある芝生の山。

佐保山 奈良縣添上郡佐保村にあり。

佐保川 大和川の上流。

武藏野 春日野の別名。

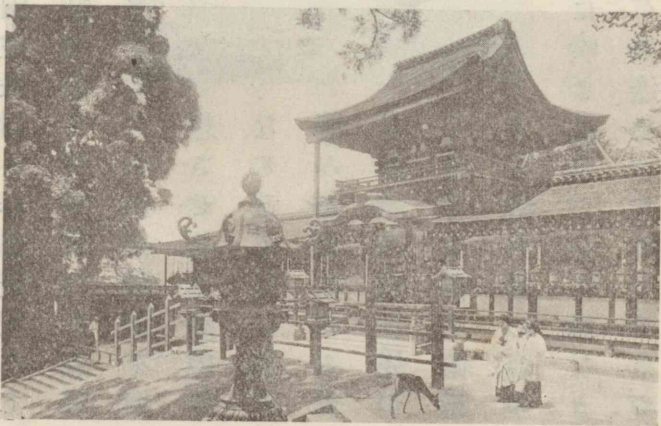
挿繪 猿澤の池。

二月堂といひ、三月堂といひ、春の名を既に負うてゐるではないか。若草山は春を象徴し、佐保山、佐保川は春を表現してゐる。二月堂の法會は、同じく武藏野であるが、關東の武藏野といへば秋月を連想させ、若草山の麓なる武藏野は若菜摘みを思はせる。二月堂の高欄に凭つて遙に故都を俯瞰する時、寧樂の春の晝はのどかにして、大杉の樹の間に咲き亂れた花は風なきに散り、遊絲はちら／＼と古き礎石の邊に立ち舞うてゐる。一點二點撞き出す鐘の音は、大氣を旋動させて、やがて消え



晝はのどかにして、大杉の樹の間に咲き亂れた花は風なきに散り、遊絲はちら／＼と古き礎石の邊に立ち舞うてゐる。一點二點撞き出す鐘の音は、大氣を旋動させて、やがて消え

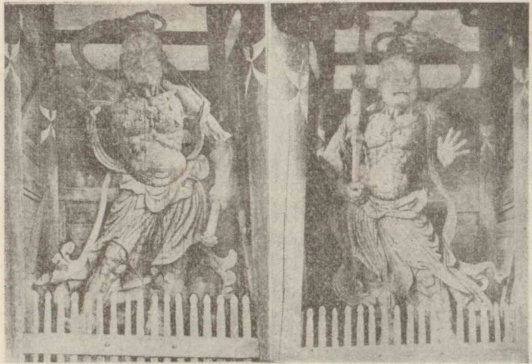
やらぬ餘韻を遠く雲間に漂はしめる。
 更に春雨の絲よりも細く降り
 こぼれる日に故都を訪ねて見よ。
 薬師寺の古塔は煙りて見え分か
 ず、法隆寺も靄の中に隠れてゐる。
 そのいにしへの繁華の名残たる
 一木一石も悉く雨に濡れて、春愁
 の情は無言の裡に深い名工が鍛
 へに鍛へた腕で彫り上げた東大
 寺南大門の仁王像は、春雨が降ら
 うと、秋風が吹かうと、一切人界を
 超越して、永劫に藝術の春を誇り
 げである。薄暗い殿堂の奥深く法の燈が幽かに瞬いてゐる



薬師寺 奈良市の西方約四
 軒。法相宗の大本山。
 挿繪 春日神社と巫女。
 法隆寺 奈良市の西南十二
 軒。奈良縣生駒郡法隆寺
 村にあり。法相宗の大本
 山。
 大佛殿 東大寺の中堂（本
 堂）をいふ。
 名工 運慶と湛慶。

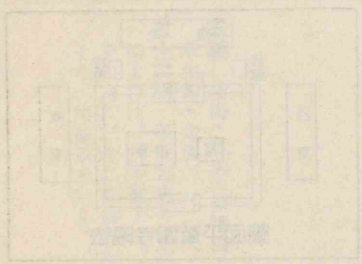
南大門の仁王像 南大門は
 大佛殿の正門。その仁王
 像は、東方の密迹金剛は
 運慶の作、西方の那羅延
 金剛は湛慶の作。

ところに、崇高尊嚴な慈悲圓滿の御佛を仰ぐ時、外には春雨
 が音もなく降りそゞいで、四邊に森嚴の氣が漲る。眼が冴え



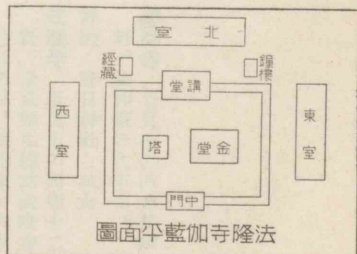
て微かな光が次第に明るくなつて、
 我なく執なく、現世を超越して、渾然
 として佛の懐にかき抱かれる心地
 がするであらう。その佛像は、一千年
 の古、非凡な藝術家が信仰の強い燃
 ゆる力を注いで、打ち下す鑿の痕ご
 とに自信の緊張を示した名作であ
 る。かかる名作に對して見れば、藝術
 が既に信仰であり鑑賞も亦信仰で

ある。
 奈良の文化は春の文化であつた。奈良の古藝術も亦春の



挿繪 東大寺南大門運慶・
 湛慶作仁王。

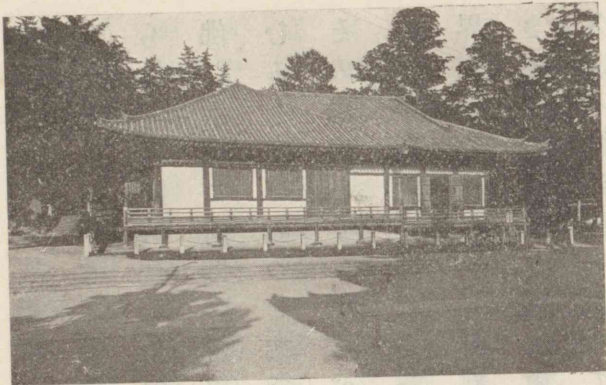
藝術であつた。藝術の奈良は彫刻の奈良である。將來せられた唐代の文化が加はつて、七堂伽藍となり佛像となつて、茲に日本文化の光は赫灼として輝いたのであつた。その影響その感化は、固より唐代の文化に多謝すべきものがあるが、藝術の日本は、藝術の唐に對して更に遜る所はなかつた。詩や文に於ては、我に李白なく、杜甫なく、中唐の名家に比敵するものはないが、ひとり彫塑の藝術に於ては、却つて彼を凌駕する勢であつた。政教一致、冥顯一の聖武天皇の御經綸は、推古孝徳兩朝の佛法流行の勢を増長して、天平時代の信



法隆寺藍平面圖

挿繪 法隆寺全景。
聖武天皇 第四十五代。
推古天皇 第三十三代。
孝徳天皇 第三十六代。
天平時代 聖武天皇が天平と改元されて以來孝謙・淳仁・稱徳の三朝に天平二十年、天平感寶一年、天平勝寶八年、天平寶字八年、天平神護二年の年號あり。佛教興隆時代に、美術工藝の進歩著しく、世にこれを天平時代といふ。(一三八九—一四二六)

仰絶頂の世を致したのであるから、信仰の對象なる佛教藝術が、彫塑の技として前後に絶する盛運に向つたのは、決して偶然ではなかつた。流石に五丈三尺餘の大佛を建立する程あつて、奈良の藝術は極めて規模が大きかつた。一面には懺悔滅罪の清淨を現して高雅端嚴



なると共に、他面には信仰敬虔の熱烈さを表はして雄偉瑰麗なるものであつた。一切五濁惡世の無量無數無邊の衆生をして、皆金色三十二相を得て、寶蓮華に坐し、無量の樂しみを享け、天の妙華を雨らし、諸天の音樂は鼓たざるに自ら鳴り、一切の供養具足せし

挿繪 三月堂側面。

五濁 劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁。
三十二相 印度古來の傳説によれば、佛や聖王は、その身に三十二の妙相をそなへてゐるといふ。

めんことはその當然の歸趨であつた。されば藝術の巨匠が
冴えたる腕に打ち下す鑿の一刀一刀には、力あり熱あり、心
血俱に瀝下して、藝術の香は繽紛として高かつた。名なく利
なく我なく欲なく、藝術家の氣魄はその作品の裡に鼓吹せ
られて、渾然冥合したのであつた。その作る所のものは、直に
佛たり、直に信仰の對象たり、直に福德を授け安樂を受けし
むるものであつた。甚深微妙の藝術が渾成するのは、固より
その由來ありと謂ふべきである。

天平時代に於ける奈良は、佛地であり淨土であり、極樂世
界であつた。しかし遷都と共に行く春の名残をとゞめて、盡
きやらぬ春愁は到る處に遺つてゐる。たゞ藝術の春のみは
久遠不滅の壽を保つて、世界的古文化の香は高い。

—(自然と文化との諧調)—

三 花のさだめ

本居 宣長

花は櫻、櫻は山櫻の葉赤く照りて細きがまばらにまじり
て、花繁く咲きたるは、またたぐふべきものもなく、うき世の
ものとも思はれず。葉青くて、花のまばらなるは、こよなくお
くれたり。大方山櫻といふ中にも品々のありて、細かに見れ
ば、ひと本毎に聊か變れるところありて、またく同じきはな
きやうなり。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色鮮
かならず。松も何も青やかに繁りたる此方に咲けるは、殊に
色はえて見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさす方より見たる
は、匂こよなくて、同じ色とも覺えぬまでなん。朝日はさらな
り、夕映も。
梅は紅梅。ひらけさしたるほどぞ、いとめでたきを、盛にな

本居宣長 鈴廼舎と號す。
伊勢國松坂の人。國學四
大人の一。享和元年(二四
六一)歿、年七十二。

るままにやうくしらけゆきて、見所なくなるこそ、いと口
惜しけれ。櫻の咲ける頃までも、散ること知らで、むげに匂な
く、ねびれ萎みて残りたるを見れば、げに在りて世の中は何
事も皆かくこそと、見る春毎に思ひ知らるかし。白きはすべ
て香こそあれ、見る目は品おくれたり。大方梅の花は、小さき
枝をもものにさして近く見たるぞ、梢ながらよりは勝れる。桃
の花は、あまた咲きつゞきたるを、遠く見たるはよし。近くて
はひなびたり。

山吹・燕子花・撫子・萩・薄をみなへしなど、とりふにめでた
し。菊もよきほどにつくろひたるこそよけれ。餘りうるはし
く、したゝかに作りなしたるは、なか／＼に品なく、懐かしか
らず。躑躅・野山に多く咲きたるは、目覺むる心地す。海棠とい
ふもの、唐めきて、こまやかにうるはしき花なり。

そも／＼かくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ、人はま
た思ふ心異なるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあ
らず。また今様の世の人のもてはやすめる花どもも、世に多
かるを、數へ出でぬはことさらめきたるやうなれど、歌にも
詠みたらす、ふるきものにも見えたることなきは、心のなし
にや、懐かしからず覺ゆかし。されど、それはた、ひとやうなる
僻心にやあらん。

木の花は

木の花は、梅、濃くも薄くも、紅梅、櫻の花びら多きに、葉色濃
きが、枝細くて咲きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きた
る、いとめでたし。卯の花は、品劣りて何となけれど、咲く頃
のをかしよう、時鳥の蔭に隠るらんと思ふにいとをかし。

(清少納言)

清少納言 清原元輔の女。
一條天皇(一六四六一一
六七一)の皇后定子に仕
ふ。

玉かつま 十五卷。本居宣
長の隨筆。

在りて世の中云々 古今集
に「残りなく散るぞめて
たき櫻ばなありて世の中
はてのうければ。讀人し
らず」と。

四 おらが春

小林 一茶

一、おらが春

昔、丹後の國普甲寺といふところに、深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始は、世間は祝をしてさゞめけば、われもせんとて、大晦日の夜、ひとり使へる小法師に、手紙したゞめ渡して、あすの曉にしかくせよと、きと言ひをしへて本堂に泊りにやりぬ。

小法師は、元日の旦、いまだ隅々は小暗きに、初雞の聲と同じく、がばと起きて、教のごとく表門を丁々と敲けば、内より「何處より。」と問ふ時、西方彌陀佛より、年始の使僧に候。と答ふるよりとく、上人は、だしにて踊り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に請じて、きのふみづから認めし、か

小林一茶 通稱彌太郎。俳諧寺と號す。信濃の俳人。文政十年(二四八七)歿、年六十五。

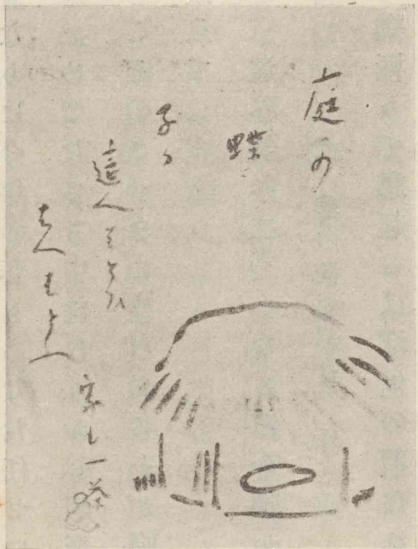
普甲寺 京都府與謝郡の地名。

きと「嚴しく」の意。

彌陀佛 阿彌陀佛、西方、極樂世界の淨土を主宰する佛。

の手紙をとりて、恭しく押し戴きて讀みて曰く、

それ世界は衆苦充滿に候間、とくわが國に來るべし。聖衆に迎へて待ち入り候。と讀みをはりて、おう／＼と泣かれけ



るとかや。

この上人、みづから企みこしらへたる悲しみにみづから嘆きつゝ、初春の淨衣をしぼりて、滴る涙を見て祝ふとは、ものに狂へる様ながら、俗

人に對して無常をのぶるを禮とすると聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。

それとは些か變りて、おのれらは俗塵に埋もれて世渡る

挿繪 一茶筆蹟。庭の蝶子が這へばとびはへばとぶ 家も一茶

境涯ながら、鶴龜にたぐへての祝ひづくしも、厄拂ひの口上めきて空々しくおもほゆれば、から風の吹けば飛ぶ屑家は、屑家のあるべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになん迎へける。

めでたさも中位なりおらが春

こぞのさつきに生れたるわが娘に、一人前の雑煮の膳を据ゑて、

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

二、露の世ながら

樂極りて愁起るは浮世の習なれど、いまだ樂半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛なるみどり子を、寐耳に水のおし來るときあら／＼しき痘はきの神に見込まれつづ、いま水膿のさなかなれば、やをら咲ける初花の、泥雨にし

痘 天然痘。

ほれたるに等しく、側に見る目さへ苦しげにぞありける。これも二三日経たれば、痘はかせぐちにて、雪解けの峽、土のほろほろ落つるやうに、瘡蓋かさといふもの取るれば、祝ひ囃して、さんだら法師といふを作りて、笹湯浴びせる眞似かたして、神は送り出したれど、ます／＼弱りて、昨日より今日は頼み少なく、終に六月二十一日の朝顔の花と共に、この世をしぼみぬ。母は死顔にすがりて、よ／＼と泣くもむべなるかな。この期に及んでは、行く水の再び歸らず、散る花の梢に戻らぬ悔いごとなどと、あきらめ顔しても、思ひきりがたきは恩愛のきづななりけり。

露の世は露の世ながらさりながら

—(おらが春)—

さんだら法師 棧イサ儀ハ（サングハラ）のこと。米俵の兩端にある圓くしてひらたき藁のふた。
神 痘瘡神。

五 旅人芭蕉

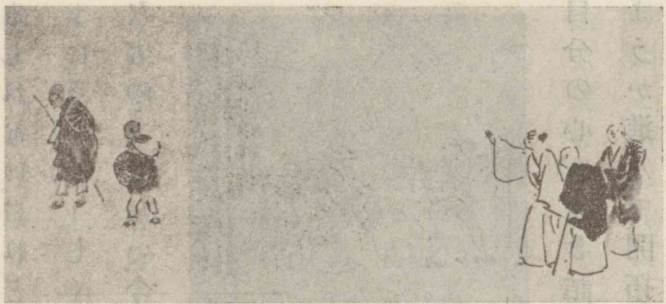
萩原井泉水

旅に出ると、外界の景色にのみ心が奪はれさうなものであるが、不思議な事には、それとは反対に自分の内部にある心の諸相が、はつきりと見つめられるのであつた。而して自分の踏んで来た生活の路筋が見渡されて、運命といふことなども考へられるのであつた。芭蕉は今更のやうに四十四年をすごして来た春秋を憶つた。幼き時から武門に出仕しながらも、勇しい事は好ましくなく、たゞ自然や人生のあはれさをじつと見つめて、涙ぐまれるやうな素質であつたのだが、主君蟬吟公が早世せられたのを動機として、人生をばかれないもののやうに思ひ切つた心が、そのまま、藝術の道にずる／＼と引きこまれて、とう／＼幼い時から好きな俳諧

萩原井泉水 名は藤吉。明治十七年東京市に生る。俳文・俳句研究家。

蟬吟公 藤堂良忠。伊賀上野の城代、藤堂良精の子。

に身も心もうち込むやうになつてしまつた。これが始から



の因縁であつたのであらう。一時は俳諧を業として、大いに門戸を張らうと思つたこともある。然し、職業としようとすれば當世では相應に俗才が必要だ。それは自分のやうな世智に疎い者には、到底出来ることではなかつた。而して貧しい若い俳諧師として、米鹽の代にも困つた時などには、どうしてこんな俳諧などに身を入れる事にしたのだらうといふ自分の愚鈍さが、自分ながら可愛さうになる事もあつたし、又そんな時には自分の作品に自信が持てなくなつて、いつ

挿繪 蕪村筆、奥の細道給
卷一。

そ俳諧などをやめてしまはうと思つた事も、幾度あつたか
 もしれない。けれども世間の俳諧といふものを見渡すと、餘
 りにそらくしくして馬鹿馬鹿しい、眞の俳諧は決してそん
 なものではない、今新しい旗を立てて、之が改造を叫ぶべき
 ものは、自分の外にないではないかと
 思ひ當るにつけて此の道の爲に自分
 と云ふ者が選ばれたのだといふ使命
 をしみとく感じて、戰場に立つやう
 な興奮を覺えた事も少なくはなかつ
 た。兎も角も當時の俳諧といふものも、
 自分の心もゆき詰つてゐたのだ。それで思ひ切つて放擲し
 ようか、進んで開拓しようかといふ追分に迷うてゐたので
 あつた。



挿繪 蕪村筆、奥の細道繪
 卷(一)。

丁度三十歳から三十六七歳までの間だつた。あの頃は隨
 分悶え苦しんだものだ。つた事が想ひ起される。氣を換へて
 祿を食む生活をしようかと思つて、幕吏になつたのもやは
 り其の頃であつた。けれども自分は一體吏員のやうな職に
 適する性格ではなかつた。それに自分の好んでゐる俳諧が、
 かうした場合には兎角誤解の種となつて、その爲に吏員生
 活も挫折せざるを得なくなつた。又その頃は大いに學問を
 して自分の愚蒙を啓かなければならぬなどと考へて、讀書
 三昧に入らうとも試みたが、机に向つてもやはり自分の好
 む俳諧の書物の方を繕き勝ちになつたり、心がいつか書物
 から脱けだして句作の境に漂うてゐたりして、學問を勵む
 事さへやつはりなし遂げられなかつた。
 こんな風で自分はどうも、無才無學、無能無藝でたつた

一筋この俳諧といふ路に引つはられてゐるのだつた。俳諧と自分とは何といふ悪縁といふのであらうか、切らうと思つても切ることが出来ず、離れようとすれば、ますます纏ひつかれてしまふ。然しそれだけ俳諧と自分とは、産れぬ先から繋つてゐたやうな深い因縁を感じずにはゐられない。此の一筋の路が、自分の歩むべき本當の路であつたのだ。その路を拓く爲に自分はめし出されたのだといふ信念が、漸く四十歳を越えたころから自分の心にはつきりと感じられて來た。而して和歌の道を踏んだ西行も、連歌の道を歩んだ宗祇も、繪畫の道を進んだ雪舟も、又茶の道を行つた利休も、其の道とその人といふ



挿繪 芭蕉木像。

宗祇 飯尾氏。紀伊の人。連歌の大家。文應二年(一一六二)歿、年八十二。
 雪舟 本名は小田等揚。畫僧。備中の人。永正三年(一一六六)歿、年八十七。
 利休 千宗易。和泉の人。茶人。天正十九年(一一二五)歿、年六十九。

ものが切つても切れぬ因縁に繋がれてゐたのに相違ない。其の道の爲に其の人が作り出されたのだとも云へよう。其の人が出て始めて其の道が作られたのだともいへよう。さういふ意味で自分は西行の心や宗祇の心をひつたりと自分の心の中に感ずることが出来ると芭蕉は思つた。又和歌の道といひ繪畫の道といひ、茶の道といひ、道はそれぞれに分れてゐるけれども、その道を貫く精神といふものは一つである。即ち藝術の精神といふものは一つである。だから其の二つの道に徹底しなへすれば、他の道の心をも亦味はふことが出来るものだ。和歌も繪畫も、今までに自分が達しえた藝術觀から理解出来る。西行や利休とも手を携へて話すことが出来る。と彼は思つた。それで俳諧の道といふものは風雅を主眼とする。風雅といふのは自然に従ふといふ事だ。

自然に従ふから春夏秋冬の推移が自分の呼吸とびつたりと合ふことになる。花は自分を離れて外に咲いてゐるものではない、自分の心が機縁に逢つて開き、而して謝しさるのだ。月は自分を離れて外に照つてゐるものではない、自分の心が圓熟して澄み、時としては又曇るのだ。この自然を心とし、心を自然として生きるといふことが、一番人間らしい生活といふものだ。それは限ない愛を體感して、人間らしい自分の身の小ささを自然の大いさの中にかかすことだ。だから自分の心が、時として乾燥したり、疎漫になつたりして、自然の光や自然の美といふものを忘れるやうになつた時は、人間らしくないあはれなものに墮したのだとも云へる。夷狄や禽獸に近づいたのだとも云へる。詮じつめれば、自然に従ひ自然にかへれ、といふ事だ。この心を心とすることが俳

諧の道を歩むといふ事だ。風雅に遊ぶといふことだ。かうした確信をいよ／＼はつきりと彼は摺みえた。而してこの確信を以て、彼は今たつた獨り長途の旅の路上にあつた。彼は少しも心細い事はなかつた。雨や風や寒さや、さうした大自然の嚴かさを身に受けるにつけても、そこに父の様な犯しがたい威容の底に、黙々として泌みでる恩愛を感じるやうな心地がした。自然に従ひ自然にかへれ。それは旅人としてこそ最も痛切に體感せらるべき事でもあつた。

旅人芭蕉

旅人と我が名よばれむ初時雨

芭蕉

此の道や行く人なしに秋の暮

同

二 奥の細道

出發

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上には生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊のおもひやまず。海濱にさすらひ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず。股引の破れをつゞり、笠の緒つけかへて、三里に灸するより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅にうつるに、

松尾芭蕉 俳諧正風の祖。伊賀に生る。元祿七年歿、年五十一。(一三〇四—二三五四)

月日は云々 李白の文に、「天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客」

去年 元祿元年。

江上の破屋 隅田川のはと

り(江上)なる深川の芭蕉庵。

白河の關 福島縣磐城郡白河の附近にありし關。

杉風 芭蕉の門人本名は鯉屋藤左衛門。

別墅 江戸深川六間堀。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峯がすかに見えて、上野・谷中の花の梢又いつかはと心細し。むつまじきかざりは宵よりつどひ



て、船に乗りて送る。千住といふ所に船をあげ

れば、前途三千里の思、胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそゞぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙
立是を矢立の初として、行く道なほすゝまず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

上野・谷中 東京市下谷区。

千住 東京の北東口。今の東京市足立区。

矢立の初 矢立の筆の使ひ初。二十一日。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、唯かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髮のうらみを重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬ境若し生きて歸らばと定めなき頼みの末をかけ、其の日漸く草加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物先づくるしむ。唯身すがらにといで立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎゆかた。雨具墨筆のたぐひあるはさりがたき餞などしたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

白河の關

心許なき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へと便求めしも理なり。中にもこの關は風騒の人心をとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の

梢なほあはれなり。卯の花の白妙に茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな 會良

とかくして越えゆくまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津嶺高く、右に岩城・相馬・三春の莊、常陸・下野の地をさかひて、山つらなる。かげ沼といふ所を行くに、けふは空くもりて物影うつらず。須賀川の驛に等躬といふ者を尋ねて、四五日とゞめらる。まづ白河の關いかに越えつるやと問はる。長途の苦み身心疲れ、かつは風景に魂うばはれ、懷舊に腸を断ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田植歌

今年元祿二とせ 元祿二年三月二十七日。吳天云々 旅のつらさを嘆じたる意。白樂天の詩「今年九月來、吳鄉。兩邊蓬鬢一時白。」詩人玉屑、關僧可士送僧詩「笠重吳天雪、鞋香楚地花。」等に據るか。草加 埼玉縣北足立郡草加町。奥州街道の一驛。紙子 紙製の衣服。さりがたき餞 ことわり難き送別の贈物。

白河の關 前に註す。

いかで都へ云々「たよりあらばいかで都へつけやらえけふ白河の關は越えぬ」と(拾遺集)

清輔 藤原氏。二條天皇の御代の歌人。治承元年(一八三七)歿す。

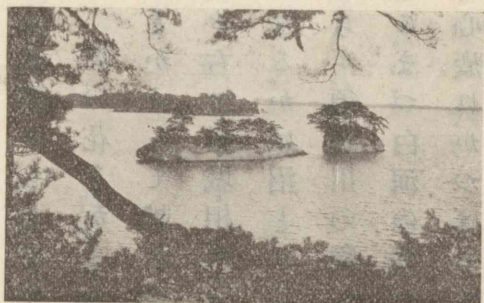
會良 河合惣五郎。芭蕉の門人。寶永六年歿す。年六十二。(二三〇八―二三六九)

阿武隈川 奥羽地方の東南部を流る。

岩城 磐城國。宮城・福島の二縣に跨がる。

相馬 福島縣相馬郡。三春 福島縣磐城郡三春町。須賀川の驛 福島縣岩瀨郡。等躬 名は相樂伊左衛門。芭蕉の門人。

松島



船をかりて松島に渡る。その間二里餘、雄島の磯に着く。抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭、西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡くして、敬つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重に疊みて、左に別れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑濃やかに、枝葉汐風に吹撓められて、屈曲自ら矯めたるが如し。千早振る神代の昔、大山祇のなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡くさん。

松島 宮城縣宮城郡。

雄島 松島瑞巖寺の山門を出て、右に見ゆる大いなる島。

洞庭 支那湖南省岳州にある湖。

西湖 湖南省懷德府永順縣にあり。

浙江 支那三江の一。浙江省の東北の瀕。

挿繪 松島。

千早振る 「神」の枕詞。大山祇 山を司る神。

雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落葉、松かさなど打煙りたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懐かしく立寄る程に、月海に映りて、晝の眺めまた改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寝するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす 會良

余は口をとぢて、眠らんとしていねられず。舊庵を別る、時、素堂松島の詩あり。原安適、松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解いて、今宵の友とす。かつ杉風、濁子が發句あり。

平泉 十二日、平泉へと心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞傳

雲居禪師 京都妙心寺の僧。寛永十三年伊達忠宗に聘せられて瑞巖寺の中興となる。萬治二年寂す。年七十八。(二二四二—二三一九)

素堂 山口信章。芭蕉の友人。享保元年歿、年七十五。(二二〇二—二二七六)

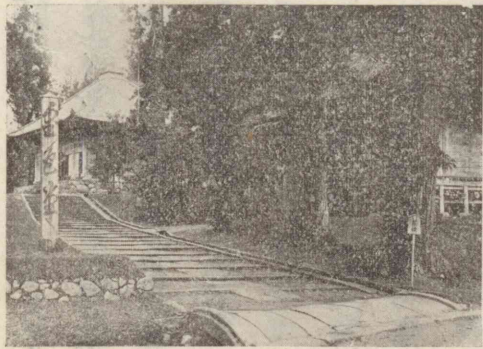
原安適 醫師。芭蕉の友人。杉風 第四〇頁參照。(二二一〇—二二九二)

濁子 芭蕉の門人。

平泉 岩手縣西磐井郡平泉村。

あねはの松 岩手縣栗原郡澤邊村にありきと。緒だえの橋 宮城縣志田郡古川町にある小板橋。

へて、人跡稀に、雉兔、葛藟の往きかふ道、そこともわかず、終に路ふみたがへて石の巻といふ湊に出づ。こがね花咲く。」とよみて奉りたる金華山、海上に見渡され、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひて竈の煙立ちつづきたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸くまどしき小屋に一夜をあかして、明くれば又知らぬ道まよひ行く。袖のわたり尾ぶちの牧まのの萱はらなどよそ目に見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふところに一宿して、平泉に至る。其の間二十餘里ほどと覺ゆ。



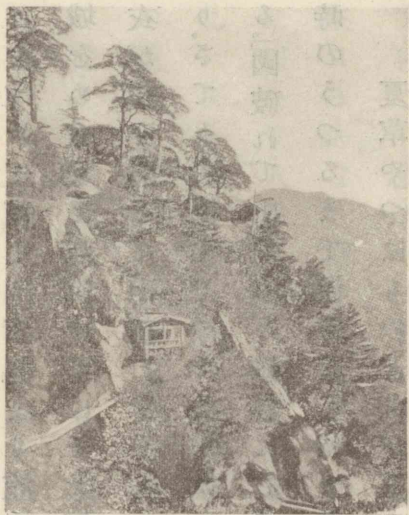
雉兔・葛藟 雉や兔を狩る獵師と、牧草や薪を採る童。孟子、梁惠王下、「文王之囿方七十里、葛藟者往焉、雉兔者往焉。」石の巻 宮城縣牡鹿郡にある港。
こがね花咲く「すめらぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山にこがね花さく」(萬葉集)
金華山 宮城縣牡鹿半島の東南端に聳ゆる小島。
挿繪 光堂。

袖のわたり 宮城縣桃生郡橋浦村。
尾ぶちの牧 牡鹿郡稻生村。
まの萱はら 同、眞野村。
戸伊摩 宮城縣登米郡登米町。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成りて、金雞山のみ形を残す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさしかため、夷をふせぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。
夏草やつはものどもが夢の跡
卯の花に兼房見ゆる白毛かな 曾良
かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚のく

三代 藤原清衡・基衡・秀衡。
金雞山 高館の西南。
高館 平泉驛の北約六町。
一に衣川館。義經の居館。
北上川 奥羽地方の東部を南流す。
衣川 岩手縣膽澤郡衣川村より發す。
和泉が城 和泉三郎忠衡(秀衡の三男)の居城。
泰衡 秀衡の次男。
國破れて云々 杜甫の詩に「國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。烽火連三月。家書抵萬金。白頭搔更短。渾欲不勝簪。」
兼房 增尾十郎兼房。義經の臣。年六十餘、白髮を亂して奮戦して死す。

さむらとなるべきを、四面新たにかこみて、薨を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千載の記念とはなれり。...



立石寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。...

四面新たに 鞘堂をいふ。正應元年、鎌倉將軍惟康親王、金色堂に鞘堂を造らしむ。

立石寺 山形縣東村山郡山寺村にあり(挿繪)。

慈覺大師 名は開仁。天台第二の座主。貞觀六年寂、年七十一。(一四五四-一五二四)

尾花澤 北村山郡の町。

かに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞えず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみ覺ゆ。...

最上川

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。ごてんはやぶさなどいふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果ては酒田の海に入る。...



五月雨をあつめて早し最上川 (奥の細道)

最上川 吾妻嶽より發して酒田港に注ぐ。ごてん 御殿林。山形縣東田川郡にあり。はやがさ 隼の瀨。東村山郡鹽川の北六軒にあり。板敷山 山形縣最上・東田川の郡界をなす。酒田の海 山形縣飽海郡酒田港。いな舟 稻を積んだ小舟。...

奥の細道 一卷。芭蕉が弟子曾良を伴ひ、元祿二年三月江戸の假寓を發し、東北をめぐり、越後・越中・美濃・伊勢に至るまでの六百里程百五十日間の紀行。

七七寶の柱

泉 鏡 花

山道二町ばかり、中尊寺はもう近い。大きな広い本堂に、一體見上げるやうな釋尊の外、寂寞として何も無い。それが莊嚴であつた。

日の光が幽かに漏れた。裏門の方へ出ようとする傍に、寺の廚があつて、其處で巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、はじめ藥師堂、次に寶物庫、さて金色堂、所謂光堂、續いて經藏、辨財天と言ふ順序である。皆參詣の人を待つてはじめて扉を開く。すぐ又あとを鎖するのである。が、寶物庫には番人が居て、經藏には、年の若い出家が、火の氣もなしに一人經机に對つて居た。

泉鏡花 名は鏡太郎、明治六年金澤市に生る。小説家。

中尊寺 岩手縣西磐井郡平泉にあり。藤原清衡の創立。

金色堂 境内の北方にあり。中尊寺の本堂。經藏、金色堂の西北にあり。

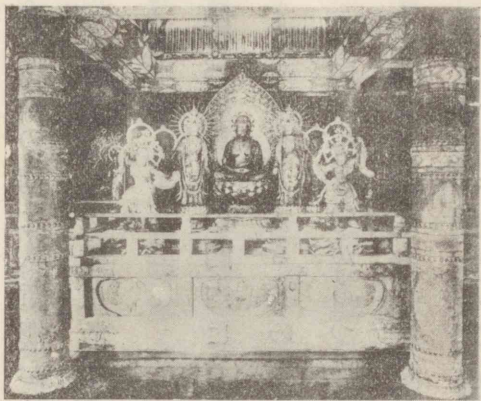
はじめ藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、この番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ、かつ芝生に散つて敷いたやうであつた。

櫻は中尊寺の門内にも咲いて居た。麓から上らうとする坂の下の取附の處にも一本見事なのがあつて、山中心得の條を記した禁札と一所に、たしか「淺黄櫻」と云ふ札が建つて居た。けれどもそれのみには限らない。處々汽車の窓から視た櫻は、奥が暗くなるに従つて、はつと冴えを見せて咲いたのはなかつた。薄墨・鬱金、また其の淺黄と言つたやうなどの櫻も、皆ぼつとりとし



挿繪 中尊寺本堂。

て曇つて、暗い紫を帯びて居た。雲が黒かつたためかも知れない。



唯階の前の花片が折からの冷たい風にはら／＼と誘はれて、さつと散つて、此の光堂の中を空ざまに、ひらりと紫に舞ふかと思ふと、羽目に浮彫りした孔雀の尾に玉を刻んで、緑青に錆びたのがなほ嚴かに美しい、其の翼をはら／＼とたたいて、ちら／＼と床にこぼれかゝる。と宙で、黄金の卷柱の光をうけて、はつと金色に翻るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を瞪つた。

挿繪 光堂内部須彌壇。

床も、承塵も、柱も固より、イめるものの踏む處は黒漆の落ちた黄金である。黄金の剥げた黒漆とは思はれない。しかも些のけぼ／＼しい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。われら仙骨を持たない身も、此の雲は且踏んでも破れぬ。其の雲を透して、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しき虹を其のまゝ、柱にして畫かれたる十二光佛の微妙なる種々相は、一つ／＼錦の絲に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中にあらはれて、清く明かに、而も幽かなる幻である。其の十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流るゝが如く輝かして、寶相華勝曼華が透間なく咲きめぐつて居る。

此の柱が須彌壇の四隅にある。まことに天上の柱である。須彌壇は四座あつて、壇上には彌陀、觀音、勢至の三尊、二天、六

十二光佛 阿彌陀佛をその光明の徳について名づけたる十二の佛名。
咲きめぐつて 寶相華・勝曼華の裝飾の美しさ。
須彌壇 寺院の中央に佛へ、佛像又は厨子を安置する壇。
彌陀三尊 阿彌陀如來を中にして、觀音・勢至の二菩薩を左右の脇士とす。
二天 帝釋天と梵天。

地藏尊が安置され、壇の中は、真中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、此に各二口の劍を抱き、鎮守府將軍の印を帯び、錦袍に包まれた三つの屍がまだ其のまゝに横たはつて居るさうである。

雛芥子の紅は、美人の屍より開いたと聞く。光堂は、こゝに三箇の英雄が結んだ金色の果なのである。

謹んで辭して、天界一叢の雲を下りた。階を下りざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巣がかゝつて、風に軽く吹かれながらきら／＼と輝くのを、不思議なる塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。さて經藏を見よ。また彌が上に懐かしい。



六地藏 六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)の衆生を化導せんが爲に、身を六體に別てる地藏菩薩。

挿繪 中尊寺經藏。

天界一叢の云々 金色堂から立ち出てしことをいふ。

迦陵頻迦 極樂に在つて美音で鳴くといふ鳥。

文珠師利 文珠菩薩。

優闍王 憍賞彌國の王。釋迦に歸依す。西紀前五世紀の人。

善財童子 菩薩の名。生れたる時、宅内に自然に種種の財寶湧き出でしといふ。

淨名居士 維摩詰(ユキマキツ)釋迦と同時の人。佛陀波利 龍樹菩薩の弟子。傳不詳。

羽目には、天女——迦陵頻迦が髣髴として舞ひつゝ、かなでつゝ浮出て居る。影をうけた束貫の材は、鈴と草の花の玉の螺鈿である。金漆塗、金の八角の臺座には、本尊文珠師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口を開けた青い毛の分厚な横顔が視られるのが、づづつと足を舉げさうな構である。右に此の轡を取つて、一寸振向いて、菩薩にものを言ひさうなのが優闍王、左に一匣を捧げたのは善財童子、この兩側左右の背後に淨名居士と佛陀波利が、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかつぐやうに杖ついて立つ。額も、目も、眉も、其のいづれもにこゝろとして、文珠も微笑んでまします。第一獅子が笑ふ、獅子が。此の須彌壇を左に、一架を高く設けて、こゝに紺紙金泥の

一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥・銀泥で本經の圖解を描く。清麗巧緻にして、且神祕である。

今こゝに來て此の經を視ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧ぐるが如く、此は月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に、色の青白い、瘦せた墨染の若い出家が一人居たのである。私の一禮に答へて、

「ご緩り、ご覽なさい。」

二二三の散佚はあらうが、言ふまでもなく堂の内壁に廻らした八つの棚に滿ちて、二代基衡の此の一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書きの一切經、竝に判官最眞の第一人者、三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板の一切經が、みな黒耀の珠玉の如く漆の架に滿ちて居る。

「一切經の全部量は、七駄片馬と稱するのである。」

毛越寺 同じく平泉にあり。二代基衡の建立。

一切經 佛教の經・律・論の三法門を悉く記したるもの。判官 義經のこと。

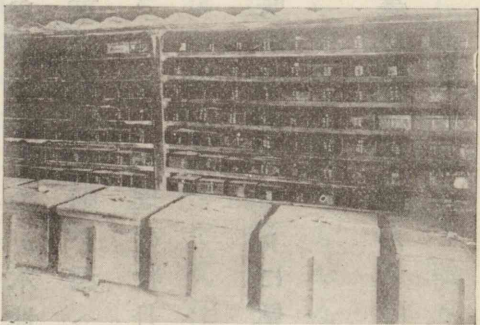
「拜見をいたしました。」

「はい。」と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で、卷袖で、寒く細りと草を行く。清らかな僧であつた。

「辨天堂を案内いたします。」と車夫が言つた。

向うを墨染で一人行く若僧の姿が、寂しく、而も何となく尊く、正にまさしく彼處におはする……天女の御前へ、我等を導く、つゝ、ましく謙讓なる一個のお取次のやうに見えた。

經堂を出た。今は眞晝ながら、月光に酔ひ、桂の香に卷かれた心地がして、亂れたまゝの道芝を行くのが、青く清明なる圓い床を通るやうであつた。



挿繪 經堂の内部。

階の下に立つて仰ぐと、典雅優麗なる辨財天の金字に縁して牡丹花の額がかゝる。いかにかにや、年ふる雨露に彩色のかすかに成つたのが、木地の胡粉を却つてゆかしく顯はして、萌黄に群青の影を添へ、葉をかさねて、白綠碧藍の花をいづく。さながら瑠璃の牡丹である。ふと高縁の雨落に、同じ花が二三輪咲いて居るやうに見えた。扉が、ぎいざり〜と——僧の姿は裏に隠れて見えずに開く。眞白き面影、天女の姿は、すぐ其處にあらはれ、蜀紅の錦といふ天蓋も廣くかゝつて、眞黒き御髪の寶釵の玉一つをも遮らない御面影の妙なること、御目ざしの美しさ、……申さ

んは恐れ多い。たゞ西の方遙かに山城國淨瑠璃寺、吉祥天のお寫眞に似させ給ふ。白理優婉明麗なる、十八九ばかりの、ほぼ人だけの坐像である。

と、手をついて對したが、見上ぐる瞳に、御頬のあたり幽かに、今にも莞爾と遊ばしさうで、まざ〜とは拜めない。

さて壇を退きざまに、僧のとざす扉につれて、畏くもおんなごりさへ惜しまれまゐらすやうで、涙ぐましく又額を仰いだ。御堂其のまゝ、私は碧瑠璃の牡丹花の裡に入つて、又牡丹花の裡から出たやうであつた。

花の影が、大きな蝶のやうに草に映じた。下向の時、あらためて、見晴しの四阿に立つた。伊勢・龜井・片岡・鷲尾、四天王の松は、畑中、畝の四處に雲を鏝ひ、揺絲の風を浴びつゝ、或者は蕭々として衣川に枝を聳か

淨瑠璃寺 京都府相樂郡當尾村。法雲院と號す。吉祥天 佛教に於ける天女の。

四天王 義經の四天王。伊勢三郎・龜井六郎・片岡八郎・鷲尾七郎。

し、或者は戀々として高館に梢を伏せたのが、彫像の如くに眺められる。
其の高館の址を靜かにめぐつて、北上川の水ははるく、瀬もなく、音もなく、雲の果てさへ見え、たゞ「はるく」と言ふやうに流れるのである。

—鏡花全集—

ひとり吉野の奥にたどりけるに、まことに山深く、白雲峯にかさなり、烟雨谷を埋んで、山賤の家處々に小さく、西に木を伐る音東に響き、院々の鐘のこゑは、心の底に答ふ、(中略)
西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方、二丁ばかりわけ入るほど、柴人の通ふ道のみはつかに有りて、さかしき谷をへだてたる、いと尊し、彼の「とくく」の清水はむかしに變らずと見えて、今もとくくと雫ちけり。
露とくく、試みに浮世すゝがばや。(野ざらし紀行)

とくく、の清水 四行法師の詠に「とくくと落つる岩間の苔清水くみほす程もなき住居かな」
野ざらし紀行 一巻。芭蕉の紀行。

ハ 自然詩人

土居 光 知

最初の自然詩人は誰であるかと尋ねたならば、多くは山部赤人と答へるであらう。西行や芭蕉も赤人を祖としてゐる。しからば赤人の自然に對する愛はいかなるものであつたらうか。赤人の歌をよんで特に注意されることは「瀬の音ぞ清き」清き白濱等、清きといふ語が續出することである。彼が愛したのは清淨な自然である。

田子の浦ゆ打ち出でて見れば眞白にぞ
富士の高根に雪は降りける
の歌に於て、彼が讚美したのも清淨の神々しさであつて、今日の登山家がよるこぶやうな偉大なる力の感じを中心にした山岳美ではなかつた。彼が自然の清淨さを讚美した裏

土居光知 高知縣の人。明治十九年生。英文學者。東北帝國大學教授。

山部赤人 柿本人麿と共に歌聖と稱せらる。聖武天皇の神龜・天平時代の人。

面には、人生の汚濁さを厭惡する心があつたであらう。當時、奈良の社會はすでに寵臣が權を専らにし、風俗が糜爛し始めてゐた。彼の祖先は顯宗・仁賢の二帝を奉戴した伊與來目小楯であるらしく、山部の姓が示す如く、世々山林官であつたとすれば、自然に親しむ性情を遺傳して來たのであらう。また「赤き心等に於ける「赤き」と「清き」とは古代語として同じ意味を有したことを考へると、赤人の名にも清淨を慕ふ心が察せられるではあるまいか。そして奈良の都會生活を見ると既に腐敗し、彼をして面をそむけしむるものがあつた。そこで彼は清淨なるものを慕ひ、自然のうちに放浪した。彼以前の自然の歌は、人生の裝飾或は背景としての自然、官能的に快感を與へる自然の歌であつた。赤人が始めて清き自然を汚れたる人生に對立するものとして、精神的に自然を

顯宗 第二十三代の天皇。
仁賢 第二十四代の天皇。

愛したのである。彼が西行及び芭蕉の先達となり、最初の自然詩人とせられるのは、彼が精神的な自然の發見者であるからである。かくて彼の自然の歌は、曾てなき清新・幽玄なるものとなつた。二三の例を示せば

烏羽玉の夜のふけゆけばひさき楸生ふる

清き河原に千鳥しばなく

吾が背子に見せんと思ひし梅の花

それとも見えずゆきの降れば

春の野に董つみにと來し我ぞ

野をなつかしみ一夜ねにける

西行は友を想ふ心をそのまゝに移して自然を愛した。彼が世をのがれた所縁は友人を失つた悲しみか、その他の理由かは知らぬが、しかしかゝる心は彼の自然に對する心持

西行 俗稱佐藤義清。歌僧。
鳥羽上皇に仕へしが、後
出家して、建久元年（一八
五〇）寂、年七十三。

のうちにも感じられる。

吉野山梢の花を見し日より

心は身にもそはずなりにき

ながむとて花にもいたくなれぬれば

散るわかれこそ悲しかりけれ

花をまつ心こそなほ昔なれ

春には疎くなりしものを

獨すむ片山かげの友なれや

嵐にはるゝ冬の夜の月

彼は自然を友として、愛すれば愛するほどさびしくなつ

た。そして淋しき心に調和する淋しき自然を友として交は

らんとした。

心なき身にもあはれは知られけり

鳴たつ澤の秋の夕暮

おぼつかな秋はいかなる故のあれば

すゞろに物の悲しかるらむ

何となく住ままほしくぞ思ほゆる

鹿のね絶えぬ秋の山里

訪ふ人も思ひたえたる山里の

寂しさなくば住みうからまし

かく彼は寂しさを友としてその奥深くたどつて行つた

のであるが、寂しさの奥には尙深刻な寂しさがあるのみで、

愛の眞の歡は見出されなかつた。

雪なれば野路も山路も埋もれて

遠近知らぬ旅の空かな

行く方なく月に心の澄み澄みて

果はいかにかならんとすらむ

風牙えて寄すればやがて氷りつゝ

かへる波なき志賀の辛崎

いづくにか眠り眠りて倒れ臥さんと

思ふ悲しき道芝のつゆ

秋ふかみ弱るは蟲の聲のみか

聞く我とてもたのみやはある

大波にひかれ出でたる心地して

助け舟なき沖にゆらるゝ

かくの如く西行は寂しさの奥へ奥へとたどつて行つた

が、これは輝く光明の道ではなかつた。それは當時の時代思潮において人間性の愛と自然の愛とは相對立するものであつて自然の愛は心情の願の否定であつたからである。西

行はこの寂しさにたへかねて、また「人」をなつかしく思つた。

淋しさにたへたる人はまたもあれな

庵並べん冬の山里

花も枯れ紅葉も散りぬ山里は

淋しさをまた訪ふ人もがな

かへりゆく人の心を思ふにも

離れがたきは都なりけり

しかし當時の厭世觀のうち、育ち、それを超越することの出來なかつた彼は、人間の愛に歸つてゆくことが出來なかつた。

わだの原遙に波をへだて來て

都に出でし月を見るかな

吉野山やがて出でじとおもふ身も

花散りなばと人やまつらむ

かくて彼はまばゆき光明にも、大なる歡喜にも、力強い信仰にも接することなく、未來に對する淡い希望と、自然の寂しい慰藉とのうちに生を終へたのである。

入日さす山のあなたは知らねども

心はかねて送り置きつる

諸共に我をも具して散りね花

うき世を厭ふ心ある身ぞ

願はくは花の下にて春死なむ

そのきさらぎの望月の頃

西行の偉大なる點は、厭世脱俗の態度を誇示し瘖我慢をすることなく、かゝる自然の心によつて慰められずして、「人間」を慕ひ何物をか眞に愛しなければゐられなかつた點に、

心の奥底から寂しがつた點にある。これは安價な愛なきさとりとりに安住し、寂しさを弄び、茶化したり、洒落でごまかしたりする人達とは比較にならぬ。さびしがるといふことは愛せずにはゐられない詩人の運命である。要するに西行の自然の愛は、赤人が歌つた如き清淨なる自然としての愛と、人間愛とが合一されたものであつたと云ふことができよう。

—(文學序説)—

わが國古來詩人多しと雖も、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後唯僅かに三人。西行宗祇芭蕉これなり。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人。

(藤岡作太郎 國文學全史)

九 自然の愛

藤岡作太郎

國民の特性は、初より其の人種に固有なるものありといへども、またその住處の地勢氣候によりて馴致せられ、變化したるもの少なからず。そのもと同じき印度歐羅巴種族が、東洋に西洋に相分れて、寛猛柔剛匹を異にする種々の國民となりたるは、南國の日北地の嵐山海さまの風物が之を養ひたるなり。日本國民が全一體として能く統合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接する國なき、その地位に影響せられしこと少なからざるべし。さらば我が國民の特性を論ずるに當りては、日本の自然についても觀察を下さざるべからず。

日本は東洋の樂園と稱せらるゝこと、歐洲に於けるイタ

藤岡作太郎 東岡と號す。石川縣の人。國文學者。文學博士。東京帝國大學助教授。明治四十三年、年四十一。

印度歐羅巴種族 主として言語によつて分類した種類の名。東は印度から西は歐洲にわたる主なる諸民族（米國人を含む）の總稱。



夕日に移るふ景趣は應接に暇あらず。晚秋菊あり、陽春櫻あ

リ！スキスの如し。氣候中和、山水明媚、瘴烟毒霧の襲ふこと

なく、猛獸毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流數百里の山野を浸すを見ず、雄大瑰偉なる大陸的風致に乏しといへども、到る處優麗嫺雅なる勝景に接す。東海の岸を縫うて進めば、富士を前にし富士を後にし、長汀曲浦浪靜かに砂滑かなり。瀬戸内海に船を行れば、松の島を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日

挿繪 長汀曲浦。

り、初夏の梢にかゝれる藤浪は、紫の綾を池水の鯉に織り出し、季冬の森鶉の聲暗き蔭に、紅の椿は拾ふ兒なしに切りに落つ。美なるかな山河、此に接するものは怒れる心も和ぎ、結べる思も解けて、愛賞に他事なからざるを得ず。山川は優美なり、穩和なり。之に馴れ之を愛する國民が、また優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、即ち自然の感化が致す所なるべし。日本の土地は孔雀を生ぜずして雉子を産す。國民の性も亦、孔雀の姿の如く濃艶ならずして雉子の如く淡泊なり。悲憤の情、時には火の如く燃ゆることありといへども、概するに、稟質猛烈ならずして穩健に、執着せずして洒脱なるも、また外圍の風物が、漸次に養ひ來れるものならんか。慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚

貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美穩和なる山川は、常に臉上に愛を湛ふる如し。接するものは之に親しみ親しむものは之を慕ふ。愛に迎へらるゝものは、愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民が、その一木一草をなつかしむは、自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には、食品も玩具も數ふるに足らず、露を帯びたる植木の葉の翠花の紅こそ、カンテラの光に映えて水々しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買ひ求めて、座敷に飾り庭に植ゑ込む。裏長屋の道具の



挿繪 夏の夜の蟲賣。

カンテラ ボルトガル語
Candela の訛。提燈。
燭臺。

据ゑ處もなき窓前にも、稗藨を作りて田舎の景色の面影を
偲び、破れ鉢に唐の芋を育ててやさしき野趣を嬉しむ。長火
鉢のわきの福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りた
る葱草は風鈴の音と共に冷し。上下貴賤を通じて、自然を愛
することかくの如きは、他の國民にその匹ありや。

我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず、自
然の愛すべきを見て、恐るべきを思はず。野をも垣をも吹き
亂す二百十日の風も、野分の名にやさしく、峰も谷も一つに
埋みてすさまじき冬の山里も深雪といへばみやびやかな
り。荒き猪も臥猪の床と唱ふるにやさしく聞ゆなど、兼好が
いへるは、我等が自然に對する此の傾向を説明せるなり。雨
といへば、照り續きたる夏などは嬉しけれど、一日の降りも
十日の照より飽き飽きするに、卯の花くだし、時雨など、いづ

葱草



二百十日の云々 「二百十
日のあらし」と「野分」と
は異なるものなれど、此
の文では、同類と見たる
なり。

荒き猪も云々 徒然草に
「和歌こそなほをかきき
ものなれ。あやしの賤山
がつのおもしろく、いひ出
づればおもしろく、恐し
きおのししも、ふすゐの
床といへばやさしくなり
ぬ」と。

れも趣ありて感ぜらる。自然の愛はかくして表るゝのみな
らず、その名を借りて屢、人事に用ふ。すでに文學には源氏物
語の名に、夕顔、末摘花、葵、神朝顔、胡蝶、螢、常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴
蟲、紅梅等あり。我等は又日常の用品にも、自然より出でたる
名を用ふ。菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅焼、時雨など枚舉
するに遑あらず。今の煙草にも福壽草、白梅、阜月、あやめ、萩等
あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるもやさ
しからずや。かくの如き類例は指を屈するに従つて思ひ出
づべく、いづれも國民が自然の昵愛を示すものにあらざる
はなし。

我が國民は、自然を愛賞する餘、又能く之を尊重せり。尊重
するものには悦んで服従す。彼等は漫に人工の手を加へず
して、自然の儘に自然を仰ぐ。此の服従を以て屈伏といふこ

源氏物語 五十四帖。紫式
部の作れる小説。一條天
皇の御時（一六四六一—
六七二）に成る。

と勿れ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは、不平なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは從順なる兒孫が寛仁なる家長を見るが如し。任意的なるものは、毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。花を愛する趣味のいかに我等の西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美はしきに、あらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するよりも、峰に渡り川に沿ひて雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちざりて手毬の如くし、日本人は、葉も枝もそのまゝに願はくは之に置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて、歡興を助くるに、一は床上の盆栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶ

に、此は形態の多趣なることを賞すること、恰も油畫と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも、彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋草花のチューリップ・ヒアシンズなど其の葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼には毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花、尾花、その花に何の美はしき處かある。されどあるかなきかの黄花を捧げて、なほなよ／＼と下蔭の蟲の音にもゆらぐ様、ますほの色はやがて白くほゞけて、霧に濡れ風に靡く趣は、我等が胸に浸みて忘れられず。日本人が花を愛するは、その外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり。直ちに自然の懷にわけ入つて、その眞意義を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。

—國文學史講話—

チューリップ Tulip
ヒアシンズ Hyacinth



ますほの色 すゝき(薄)の
赤みがかりたるをいふ。

一〇 折節のうつりかはり

吉田 兼好

折ふしの移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。

「物のあはれは秋こそまされ」と、人ごとにいふれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども、ことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣ねの草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう／＼けしきだつ程こそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、萬づにたゞ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古のことも立ちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

吉田兼好 卜部氏。歌文を能くす。正平五年歿。年六十八。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂りゆく程こそ、世のあはれも、人の戀しさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鶏の叩くなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見え、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。棚機祭るこそなまめかしけれ。やう／＼夜寒になるほど、雁鳴きて来る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草子などにことふりにたれど、同じこと、また今更にいはいはじともあらず、おぼしき事いはぬは腹ふくるゝ業なれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、搔いやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

灌佛の頃 佛生會。四月八日。
祭の頃 賀茂の祭。四月中の酉の日。

源氏物語 紫式部の作れる小説。
枕草子 清少納言の隨筆。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさく、劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとままりて、霜いと白う置ける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。追儼より四方拜につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たゞきはしりありきて、何事にかあらむ、ことごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方より流石に音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ほそけれ。亡き人の來る夜とて、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方には、な

御佛名 十二月十九日から三日間宮中に行はるゝ佛事。六根の罪を消滅させる爲である。
荷前の使 毎年諸國より奉る貢穀の荷の初穂を諸陵に献ずる。その使を荷前の使といふ。十二月中の吉日を選んで遣はされる。

ほすることにてありしこそあはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

徒然草

徒然草から受けた影響の一つと思はるゝものに自分の俳諧に對する興味と理解の起原があるやうに思ふ。この本の所々に現れる自然界と人間の交渉、例へば第十九段に四季の景物を列記したのも、それが枕草子とどれだけ似てゐるとか、ちがふとかいふことはさて置いて、その中には多分の俳諧がある。型式的概念的に墮した歌人の和歌などとは自らがたつた自由な自然觀が流露してゐる。

（吉村冬彦）

吉村冬彦 本名寺田寅彦、理學博士。明治十一年生。

一一 流泉・啄木

今は昔源博雅といふ人ありけり。延喜の御子兵部卿親王の子なり。萬づのことやんごとなかりける中にも、管絃の道になむ極みたりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえもいはず吹きけり。この人村上の御時に殿上人にてありけり。その時に逢坂の關に一人の盲庵くらみを造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雜色まじりにてなむありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなむ微妙に弾く。

然る間、この博雅ひろかこの道を強ちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞

かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人をもて内々に蟬丸にいはせけるやうなど思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし」と。盲これを聞きて、その答をばせずして曰く、

よの中はとともかくても過してむ宮も藁屋もはてしなれば

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくく覺えて思ふやう、我強ちにこの道を好むによりて、必ずこの盲に會はむと思ふ心深く、それに盲命あらむことも測り難し、また我も命を知らず、琵琶に流泉・啄木といふ曲あり、これは世に絶えぬべきことなり、唯この盲のみこそこれを知りたるなれ、かまへてこれが弾くを聞かむと思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を彈

源博雅 琵琶の名手。克明親王の長子。博雅三位と稱す。天元三年歿、年六十二。(一五七九—一六四〇)
 延喜の御子 醍醐天皇の皇子。
 兵部卿の親王 克明親王。
 村上 第六十二代の天皇。
 逢坂 大津市の南、京都府と滋賀縣との界にあり。
 敦實 宇多天皇の第八皇子。宇多源氏の祖。康保四年歿、年七十一。(一五五七—一六二七)

くことなかりければ、その後三年の間、夜な／＼逢坂の盲が庵の邊りに行きて、その曲を今や弾く今や弾くと密かに立聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはかげりて、風少し打吹きたりけるに、博雅あはれ今宵は興あり、逢坂の盲、今夜こそ流泉・啄木は弾くらめと思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲、琵琶を搔鳴らし、物あはれに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞くほどに、盲、獨り心を遣りて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきにしひてぞゐたる世
を過すとて

とて琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞きて、涙を流して、あはれと思ふこと限りなし。盲、獨言に曰く、「あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすきものや世にあらむ。今夜心得たらむ

人の來よかし。物語せむ」といふを、博雅聞きて聲を出して、「王城に在る博雅といふ者こそこれに來たれ」といひければ、盲の曰く、「かく申すは誰にかおはします」と。博雅の曰く、「我はしか／＼の人なり。強ちにこの道を好むによりて、この三年この庵の邊りに來つるに、幸に今宵汝に會ひぬ」と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅、流泉・啄木の手を聽かむ」といふ。盲、故宮はかくなむ彈き給ひし」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、唯口傳をもてこれを習ひて、返す／＼喜びて、曉に歸りけり。

これを思ふに、諸の道は唯かくの如く好むべきなり。それには近代はげに然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸卑しきものなりと雖も、年頃宮の彈き給へる琵琶を

聽きて、かく極めたる上手にてありけるなり。それが盲になり
りにければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶
は世に始れるなりとなむ語り傳へたるとや。〔今昔物語〕による

劍

白銀の目貫の太刀をさげ佩きて、奈良の都をねるは誰が子
ぞ、ねるは誰が子ぞ。本

石の上、ふるや男の太刀もがな。組の緒垂でて宮路通はむ、宮
路通はむ。末〔神樂歌〕

老鼠

西寺の、古い鼠、わか鼠、御裳つんづ、袈裟つんづ、袈裟つんづ。法
師に申さん、師に申せ。法師に申さん、師に申せ。〔催馬樂〕

早春

氣霽風梳新柳髮、氷消浪洗舊苔鬚。都長春〔和漢朗詠集〕

今昔物語三十一卷。宇治大納言物語ともいふ。源隆國の著なり。天竺・震旦・本朝の小話を収録せるものにて、毎篇の始を「今は昔」の語にて筆を起せり。

神樂歌 平安朝時代に流行せし歌曲にして、朝廷の儀式又は神社の祭禮の舞樂に用ひらる。その現今に傳はれるもの三十七曲あり。

催馬樂 奈良朝時代には民謡なりしが、平安朝時代には宴遊の興となり、又神事の餘興に用ひらる。現今に傳はれるもの六十曲あり。

和漢朗詠集 二卷。藤原公任の撰。和歌と漢詩の佳句との朗詠の資料たるべきものを集む。

二三 今 様

一、四 季

慈 鎮 和 尙

春のやよひのあけぼのに、四方の山邊を見わたせば、

花ざかりかも白雲の、かゝらぬ峰こそなかりけれ。

花たちばなも匂ふなり、軒のあやめもかをるなり、

夕暮さまのさみだれに、山ほとゝぎす名告りして。

秋のはじめになりぬれば、今年も半ばは過ぎにけり。

わが世ふけゆく月かげの、かたぶく見るこそ哀なれ。

冬の夜寒の朝ぼらけ、契りし山路は雪ふかし。

慈鎮和尚 關白藤原忠通の子。天台宗の大僧正。嘉祿元年（一八五）寂、年七十一。

心のあとはつかねども、思ひやるこそあはれなれ。

二、蓬萊山 讀人しらず

蓬萊山には千歳ふる、萬歳千秋かさなれり。

松の枝には鶴巢くひ、巖のそばには龜遊ぶ。

そば(稜)

三、古き都 藤原實定

古き都を來て見れば、淺茅が原とぞあれにける。

月の光はくまなくて、秋風のみぞ身にはしむ。

古き都 京都のこと。當時、都は福原に遷れり。
藤原實定 後徳大寺左大將。歌人。右大臣公能の子。建久二年(一八五一)歿、年五十三。

二三 平安朝時代の郊外

佐々政一

平安朝は奈良朝文化の後を受けて、我が國の歴史上に燦然たる文明の光彩を放つた時代である。後世の制度文物は、實に多く其の範を此所に得て居つたのである。併し如何に文明が進んだといつても、交通といふことに就いては、上代よりは道路も完全し、種々の方法も講ぜられたであらうが、決してまだ今日のやうなものでは無かつた。自分の住宅から三里も四里も遠い處に、事務所や店を置いて、朝夕三十分か一時間で電車に乗つて通ふなどといふ事は、其の時代の人々の夢想だもしなかつたことである。此の時代は、別して乗物などといふものは牛車か馬の背を利用した位のもので、それも殆ど上流社會の人に限られて居て、下層民は唯定

佐々政一 醒雪と號す。京都の人。文學博士。東京高等師範學校教授。大正六年歿、年四十六。

まつた自分の仕事を毎日こつ／＼と爲て居さへすればよかつたのである。従つて其の時分は、現代の郊外生活といふやうな事は、殆どなかつたと言つてもよい位であつた。

此の時代の郊外といへば、まづ主として嵯峨野や河東白河邊を指すのが適當であらうと思ふ。當時この邊は、住宅地といふよりは寧ろ遊歩場であつた。和歌にも詠まれたやうに、正月の子の日には、此の邊で小松引といふやうなことが盛んに行はれた。それは京都の公家達や其の他上流の人々が、郊外に出掛けて行つて、小さな木を引き抜いて遊んだのである。小松引といつても、必ずしも小松ばかりでは無かつた。何でも其の近邊に生えて居る小さな木であればよかつたのである。そして、それを家に持つて歸つて、前栽せんざいに植ゑて眺めた。又秋になると、一寸これに類した事があつた。

嵯峨野 もと山城國葛野郡

の町名。今、京都市右京

區。

河東白河 鴨川の東の白

河。京都の東北なる白川

沿岸の地。

正月の子の日 正月の上の

子の日、人々野に出て

て、小松を引いて遊び、

干代を祝ひしこと。子の

日の遊び。

拾遺集に、「子の日する野

邊の小松のなかりせばち

よのためしに何をひかま

し。忠岑」と。

前のは主として木を引抜いて來たのであつたが、これは草類を掘るのである。萩だとか桔梗だとか刈萱、女郎花など種々の秋草をめぐ／＼掘つて來て、それを前と同じやうに前栽に植ゑて楽しんだのである。で、此等は、現今私どもが茸狩に出掛けたり、釣に行つたりするやうに、前栽に植ゑて置いて、後でそれを眺めて楽しむといふやうな事も、無論したには違ひないが、主として掘りに行くのが楽しみであつたのである。茸狩でも、魚釣でも、行く人は茸を食ふ爲や、或は魚を養ふを目的で出掛けるのではない。取つて來たり、釣つて來たりすれば、それを料理して一日の事を話しながら食ふのも、無論愉快には相違ないが、出掛ける目的は、茸を捜し廻つて取ること、魚を釣ること、それ自身の中にあるのである。此の時代の小松引、或は前栽掘などといふことも、全くそれ

と等しく、敷物や、辨當などを従者に擔がせて、郊外に出掛け
て、一日を面白く騒ぎまはるといふ事が楽しみなのである。
春は若菜摘だとか、又秋になれば秋で、月見蟲聞、野遊びなど
で、兔に角郊外に出て遊ぶといふ風習が盛んであつたやう
である。現今西洋人が安息日というて日曜日には家業を休
んで、提籠の中に食物や飲物などを入れて、公園又は郊外の
草原などに出て、一日を楽しく遊び暮すやうに、當時の人達
も、やはり楽しい一日を郊外に送るといふ風習であつた。

そんな工合であつたから、同じ嵯峨野の中にしても、特に
眺めのよい處とか、或は又、地勢や何かの關係から人々の多
く集まる處とあまり行かぬ處とはあつたに違ひないので
あるが、特に人の多く集まる處だからと言つて、其處の人の
爲に休息所といふやうな物の設けは無かつたらしい。尤も

當時商業などに就いては、あまり記録が無いので、よくは知
ることが出来ないけれども、其の頃の物語類などに、さう見
えない所を見ても、まづ無かつたものらしく思はれる。

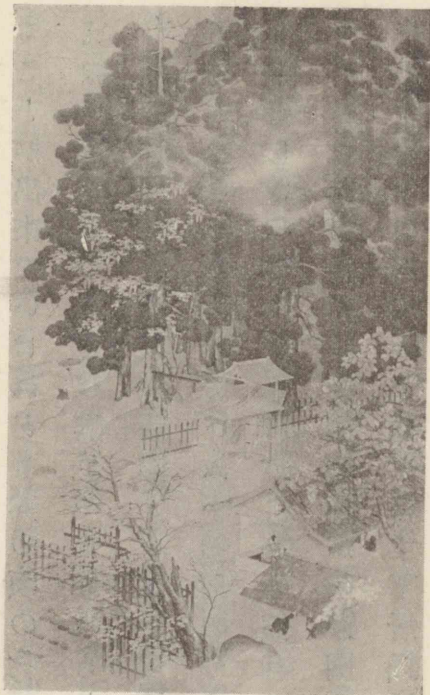
此の時代には、各人が莊園といふものを作ることを考へ
て居つた。それは後世でいふ小領地のやうなもので、どこで
も開墾しさへすれば、それが自分の領有となつたのであつ
た。だから近郊の地は大部分誰かの莊園となつて居つたの
である。従つて此等の土地を耕す下層民は、今から見れば、ま
るで小屋のやうな物であつたらうが、ともかく住居を作つ
てゐたのである。

貴族の別莊などは景勝の地に建てられてあつた。鳥羽・龜
山・水無瀬などといふ處には、皇族方の御別莊も建てられて
あつて、或は其處に常住せられ、或は時折の遊山に成らせら

鳥羽 京都市南郊の地。今、
上鳥羽は下京區、下鳥羽
は伏見區に屬す。
龜山 山城國葛野郡の地
名。後嵯峨・龜山兩上皇
の御所のありし地。
水無瀬 攝津國(大阪府)三
島郡島本村の地名。

れることもあつた。又此の時代は文學の非常に盛んな時であつたので、詩や歌の會などは、主としてこの別荘のやうな所で行はれた。

見渡せば山も霞む水無瀬川
（新古今集）



いふことが盛んに行はれた。また子供が一人前になると自

などとおよみに
なつた後鳥羽院
の水無瀬殿など
は、實に當時有名
なものであつた。
當時の公家達
の間には、分家と

水無瀬殿 水無瀬にありし
後鳥羽上皇の離宮。今、
水無瀬神社。
挿繪 雨の白河。(田村彩天
筆)

分の家は子供に譲つて、自分達は隠居するといふやうな事も起つて、さうした人達が、郊外に家を建てて住まつてゐるといふやうな例もあるのである。で、當時の人は、多く隠居すると僧になつた。従つて其の住宅は寺となつたのであつた。故に昔の寺には決して住家と變らず、各人の住宅が其の儘寺であるものもあつた。後年禪宗が渡つて來てからは、寺に種々な形式を用ゐるやうになつたけれど、當時は別に變らなかつたのである。だから、今でも京都のごく古い寺を見ると、當時の住宅と少しも變つてゐない。

そしてさうした住宅は、垣も低くし、門なども極めて開放的なものであつた。住宅に塀や何かをつけるやうになつたのは、武家時代からの風習であつて、當時は極めて開放的であつたのである。陛下が舞を御覽ぜらるゝ爲に、近郊の地に

舞臺を作られて、一方に玉座が設けられる。陛下が其所から御覽になつてゐらせらるゝと、すぐ左右から公家達が侍して、同じく拜觀してゐる。すると向うの岩蔭や叢の中からは、土地の下人どもが首を突出して、等しく其の舞を拜觀するといふ有様であつた。當時の上流人と下層民とは、其の生活状態から見ると、非常な距離があつたのであるが、斯うした事に就いては、下層民だからといつて、無下に叱りとばす程狭量では無かつたのである。別荘などで、戸を開け放して置くと、外面を使が走るなどが、座敷の中からよく見られる。それをむしろ興ある事に思つて居つたのであつた。

さうした別荘や寺は、大きなものは種々の方法に依つて保存されるけれども、小さいのは主が無くなると、其の儘立ち朽れになるので、空家や破家といふものは到る處にあつた。彼の有名な小督の局が身を寄せられたと言ふのも、或はさうした所であつたかも知れない。國司にでもなつて遠國に出向く時などは、隣人に其の家を託したものであるが、頼まれた人も、自分の家で無いから、掃除なども満足にはしてくれない。そんな工合で、三年なり四年なりの任期を終つて歸つて見ると、眼も當てられぬやうになつてゐたなどといふ事は當時に於て、決して珍らしいことでは無かつたのである。

荒籬見露秋蘭泣 深洞開風老檜悲。

(秋日過仁和寺。源英明一和漢朗詠集)

君なくて荒れたるやどの板間より月のもる
にも袖はぬれけり

(讀人不知古今六帖)

小督の局 高倉天皇の寵姫。權中納言藤原成範の女。後、故ありて嵯峨野に隱栖す。今、その遺址、大堰川渡月橋畔にあり。

一四 新緑の印象

田部 重治

渾沌の世界から統一の世界に入り、夢幻の境地から現實の明確に覺めるところに、官能の形像があらはになつて來る。冬の沈黙から表現へと移つた自然の姿態は、五月の新緑といふものに於て最も豊かな至醇な自己表現となつてあらはれる。それが如何なるものを告白してゐるか、又如何なるものの象徴であるかは、唯詩人や豫言者の解釋に任せて、自然はその進行の刻々に表現さるべきものに就いてのみ忙がしい。

眠れる自然から覺めたる自然に移るこの經過は、何と激しい變化であらうか。冬の空寂から、五月の若葉の殷賑に至るまでの、官能に訴ふるものの逕庭は何と甚しく大きなものであらう。しかもかくの如き新緑の若々しさも冬の自然の空寂も、その内容に於ては増減なきものの變化の形態に過ぎないとすれば、五月の新緑は、最も生々した男性的表現に生きようとする人格の緊張に譬へて不可ではなからう。そしてその表現の力は、いつもその刻々開展して行く刹那に存してゐると言つてよからう。この刻々開展して行く刹那の力の表れは、際立つて鮮明な新緑の尖端である。この尖端こそ、過去と未來とを最も微妙に結び附ける半ば物質的な、半ば靈的な現象である。

この新緑の尖端は、自己を最も強く實現しようとする力であり、あらゆる希望、過去を一點に生かさんとする努力の象徴である。恐らくは最も男性的な努力であらう。人は五月の若葉の感じを、浪漫的な情緒と批評するかも知れない。し

田部重治 明治十七年新潟縣に生る。東京帝國大學英文科出身。法政大學教授。

新緑の印象 田部重治著 昭和十一年三月
 東京 法政大學出版部

新緑の印象 田部重治著 昭和十一年三月
 東京 法政大學出版部

かし燃ゆる若葉の現す情緒は飽くまで現實化しようとする努力に充てる男性的なそれであつて、かのいたづらに空想に樂しみ、夢幻に荒さむ夢想者の態度とは全然趣を異にしてゐる。

心ある人は、つくつくと若葉の尖端に現れる、生きようとする力と魂との閃めきの強いことを認めなければならぬ。そしてこれを認め得た人はこの靈の力に觸れんとするには、私達を囚へる因襲的な觀察や、今迄慣れ來つた習俗の力が、餘り多く私達の周圍を取巻いてゐるのに氣が附くに相違ないであらう。カーライルが云つてゐるやうに、私達は「自然」と云ふ言葉のある爲めに、この一語の下に無造作に凡ての物を一括して、その内容に觸れようとはしない。そして自然に對して眞に驚異の眼を開くことは、全く特殊の人々に限られてしまつてゐる。あらゆる妥協、因襲を排して「自然に還れ」の叫びは、過去に於て發せられた時、それは人性の根本に還るの意味を含んでゐる以外に、自然に對して驚異の眼を開くの内的要求を必然に含んでゐた。自然に對して驚異の眼を開かなくなつた時は、私達の精神が停滯して、常識に死する時である。

カーライル Thomas Carlyle (1795-1881)
英國の文學者。思想家。

に限られてしまつてゐる。あらゆる妥協、因襲を排して「自然に還れ」の叫びは、過去に於て發せられた時、それは人性の根本に還るの意味を含んでゐる以外に、自然に對して驚異の眼を開くの内的要求を必然に含んでゐた。自然に對して驚異の眼を開かなくなつた時は、私達の精神が停滯して、常識に死する時である。

花が象徴するものは、浪漫的な喜びであるとするれば、新緑の情緒は、更に一步現實に踏み込んだ悩みである。そして花の喜びに伴ふ音樂は驚であるとするれば、新緑に伴ふそれは、時鳥の聲である。驚の喜びは、喜び自身にとゞまつてゐるが、時鳥の叫びは浮かれた心を現實にひき戻す悩みの叫びである。驚の聲は花自身の如く宛轉として圓みがあるに反して、時鳥の叫びは、新緑の刻々發展するにつれてのやるせな

い悩みの象徴である。花をのみ美はしいと思ふ心は、浮かれた心である。新緑に深き味はひを認めることは、生を味はつた後の心でなければ得難い。それだけ新緑には現實の深みが伴つてゐる。

私の新緑に關する經驗は、いつも時鳥の叫びと必然に結びつけられてゐる。

—(山と溪谷)—

みどりかをがむ

みどりかをがむ、積み重なる樹の果を拜む、
さびしい下宿の窓から、
のぼる町のけふりと緑とをがむ。
けふも安らかに暮れて行くゆゑ、緑をがむ。

(室生犀星)

室生犀星 本名照道。明治二十二年金澤市に生る。詩人。

一五 雨の興

松平定信

「月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄み渡りぬるものなれ。されど闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風高く吹き交ふは、又優りぬるやうに覺ゆ。」といへば、雨ぞいと優りぬるを。といふ、いかに。」と問へば、「いでや早天の雨は更なり、草木の花咲き、實のるも、皆此の恵みにこそあんなれ。又其の感情の深さをいはば『今日は元日なりけり。』といふに、雨そぼ降りて霞み渡りたるは、『げに春や。』とぞ思ふめる。師走の晦のどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いと細やかに降れるが、衣潤せども降るとは見え、軒の玉水も間遠に音して、住みすてし蜘蛛のいに玉ぬく景色、庭の面の枯生の底に

松平定信 老後に樂翁と號す。磐城國白河の城主。後に徳川吉宗に仕へて幕府の老中となる。文政十二年(二四八九)歿、年七十二。

い(蛛網)

緑や、添ひ行くも、柳の絲の動きもやらで露添ふも、共にいと長閑なり。燈火挑げても、何となく光濕りたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄み渡りぬるぞかし。その外、梅が香の濕り、夜深く匂ひ渡るも、花に憂しとかこちぬるも、あはれはありけり。春も老いゆく頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。郭公の初音いかにと思ふ頃、村雨のはらくと降り出でたるも、五月雨の幾日も降り暮して、書の卷々繰り返しつゝ居たれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。又暑さに堪へかぬる頃、雲の漲り出づる勢ありて、風一しきり吹き落ちたるに、柳蓮などの葉裏白く見せたるも涼しやがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後には頻りに降り來て物音も聞えず、土の匂ひ來るもいと心地よし。軒端は玉の簾かけたらむ様に、玉水の絶え間なく落ちたるに、庭

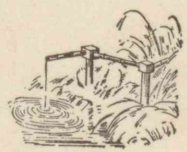
は一つ湖になりて、あるは瀧落し、又は水走らせたるに、人々暫し物いはで打守り居たるもをかし。や、雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へ躍り出でて餌拾ふさまなり。初め雲の立ち出でし方は、はや空の一入緑に見えて、虹など見ゆるに、木々の緑の庭濼にやに影見ゆるもいと涼し。老いたる女など、雷の音に驚きて這ひ出でたるが、『今日のは若かりし時のごと、よく霽れにけり。今時のは、かく霽る、事稀なり。』などと、はや繰言いふもあり。『彼はかくあわてし。』などいひて、かたみに笑ひどよみつゝ、『今日は蚊も少なかるべし。雷の音もいと微かなり。この頃の暑さも忘れぬ。』とて、端近う出づれば、夕月の光さし渡りて、草木の露も玉なすに、肥え膨れたる蛙の物待ち顔に空打ち睨みて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。秋來る頃の雨は昨日に變

りて、何となう淋し、萩の上風、外山の鹿の音など、月よりも身に沁む心地ぞする。常に聞き馴れし、水の音までも、哀



れ深くこそ。月の前の村雨も亦をかし。まいてや、夜寒の頃、鳴き嘎したる蟲の音の、雨のをやみに幽かなる聲して、枕近く鳴きよるもあはれなり。この雨に木々も染めなむと思へば、『葺なども生ひいでなむ。栗もはや落つべし。』など

と、童の物淋しげに燈に向かひつゝ、言ひ出づるも、げに様々なり。夜深き鐘の音の打ち濕るものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、今は世に亡き友の事も思ひ出でて、鐘撞く人の心をもあはれと思ふばかり、感情は深かりけり。紅葉の



挿繪 松平定信自畫像。

染めそふも、白菊の移り行きて一盛見するも、尾花の露重げに打萎れたるに、龍膽の怨深く咲きたるあたりもつきづきし。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、晝過ぐるまでも凋み後れたる、亦あはれなり。野分の風はおどろおどろしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあはれを添ふるは、秋の習なるべし。時雨のさと音して、夕日に白く降り來るも、又音かへて枕とふもをかし。月よりも、闇の夜よりも、あはれ深きものには侍らずや。といへば「かやうにいひ並べては、げにもといふべからむが、一年も降る心地して、よみ見れば、この雨はをとつ日より降り出でしをと思ふ心は變らじ。」と、心の中に思ひて聞き居しも、亦をかしかりけり。

—(花月草紙)—

よみ見れば 數へて見れば。

一六 海邊

中島 廣足

一、舞子の濱

舞子の濱といへるところは、播磨路にていとをかしきところなり。生ひつゞきたる松のひろごりふしたる枝々、高うあらはれたる根のさまなど、ことどころに似ず。渚に寄する波、沖行く帆影など、淡路の島も目に近くて、取りあつめたる景色いはん方なし。いとちひさきをうかべて渚離れず漕ぎ行きつゝ、「舟よ、舟よ。」と呼ぶこゝろをかしきに、「しばしがほどを。」と呼びよせ打ち乗りて、疲れたる足をやすめつゝ、濱の方を見やれば、後れ先だつ旅人の、松のひまより見えがくれして、扇さし出でつゝ、打ちまねきなどしたる、海より見るけしきは、たえも言はずをかしく、春日ゆくともよに飽くまじ

中島廣足 樞園と號す。熊本の人。國語學者。歌人。元治元年(二五二四)歿、年七十三。

舞子の濱 播磨國(兵庫縣)東南部の勝地。

き眞砂路のさまになん。

二、漁村

蟹かきのすみかばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の、風もたまらぬ松かげなどに、たゞかりそめに造りたる藁屋どものさま、浪打ち寄せなば、やがて流れも失せぬべう、いとほかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、何心地かせましと思ひやるだに、心細し。夕つ方など、年老いたる男の子の手がらみしたるが、いそべに立ちて、けふはいと遅くもあるかな、などいひつゝ、沖の方をまもりをり。孫どもにやあらむ、眞砂の上を走り歩きつゝ、遊びゐたるに、入日さしたる島影より、三つ二つ歸り來る舟の舵ひきをりて、誇らしげなるを、老人待ち得顔にうちほゝ笑みたるは、幸多かりしにやと見ゆ。渚によせて、跳び下るゝまゝに、綱くりよせ

などとかくしつゝのゝしるに、男も女もあまた出できて、大きな籠に魚どもとりいれつゝ擔ひもてゆくさま、さはいへど賑はしげなり。くゞつめくものもて来て、小さき魚三つ四つ乞ひもてゆく童などもあり。すべて人多くたちこみ騒ぎて、舟のあたり喧しく、さしよりのぞくべうもあらず。いとながき網の渚にかけほしたるを、くりためてとりいれなど、やう／＼静まりゆけば、こなたかなた火ともしたる透影、壁もあらはにて、いとあはれにみゆ。一夜宿りてみれば、浪風の響枕をゆりて、つゆまどろまれず。曉方隣の家々目さまして、なりはひのことどもなるべし、怪しう聞きしらぬことも、己がじし聲高にのゝしりかはしたる、げに蟹のさへづり、珍しうもをかしうも。

—(檀園文集)—

くゞつ 網の袋。

二七 芳流閣

瀧澤 馬琴

古の人言はずや、禍福は糾へる繩の如し。と、人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る所はた禍の伏す所。彼にあれば是にありとは思へども、豫てより誰か能く其の極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀心に占めつ身につけつ、艱苦のうち、年を経て、得難き時を得てしかば、遙々辭我へ齋して、名を揚げ家を興すべかりし、其の福は禍と、ふり替りたる村雨の刃は、舊の物ならで、我が身を劈く譬とぞなりし、憾を爰に釋く由もなく、猝急にして意外にあり、僅に當座の辱を避けばやと思ふばかりに、影の圍を切り開きて、芳流閣の屋の上に、攀ぢ登れどもとにかくに、脱れ去るべき道の無ければ、其處に必死を極めたる心の

瀧澤馬琴 名は解。曲亭と號す。江戸の人。徳川末期の小説家。嘉永元年(二五〇八)歿、年八十二。人間萬事塞翁が馬 淮南子(エナンジ)にある故事。元の僧照晦機の詩に、人間萬事塞翁馬。推枕軒中聽雨眠。と。福の倚る所云々 老子に「禍兮福所倚。福兮禍所伏。孰知其極」と。犬塚信乃 八犬士の一人。名は成孝(モリタカ)。孝の字のある玉を所持す。親 足利持氏の臣犬塚番作。辭我 下總國(茨城縣)猿島郡古河町。足利成氏の館の地。ふり替りたる ふりは「振り」に「降り」を懸けた

中は如何なりけん、思ひ遣るだにいと痛まし。
 されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄
 舎に繋かれし、禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞか
 かる捕手の役儀。犬塚信乃を搦めよとて、慙に擇み出されつ。
 他の憂を身の面目に、今更用ゐられん事、願はしからずと思
 へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、彼の樓
 閣は三層なり。其の二層なる檐の上まで、身を霞ませて登り
 て見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、頃は六
 月二十一日、昨日も今日も乾蒸の燄熱の渡る敷瓦は、凸凹隙
 なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に入る、
 流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫緒絶えて、進退既に谷
 れる敵にしあれば、いかで我、繋ぎ留めんと、颯の、樹傳ふ如く
 さらさらと、登り果てたる三層の屋根には、目柴翳す由もな

村雨の奴 信乃の父番作
 が、舊主持氏から預りて
 守護せる名刀。鞘を拂へ
 ば刃尖より村雨の如き水
 氣を生ずるといふ。
 舊の物ならて云々 信乃は
 父番作の歿後、伯父犬塚
 養六に養はる。養六一夜
 信乃を川漁に誘ひ、わざ
 と誤つて自ら水中に没
 す。信乃泳いでこれを救
 ふ間に、養六と共謀せる
 同舟の悪漢綱干左母次郎
 が村雨の中身をすりかへ
 たり。

芳流閣 藩我城中の三層
 樓。

犬飼見八信道 八犬士の
 一。信の字のあらはれた
 る玉を持つ。

犯せる罪のあらずして云々
 見八は、執權在村と意が
 合はず、任ぜられし職役
 を辭退し自ら身の暇を請
 ひし故、主命に叛くの理
 由で投獄さる。

坂東太郎 利根川のこと。

く、透を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上
 なる鶴の巢を、巨蛇の窺ふに似たりけり。

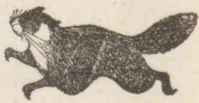
廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せる床



著 作 翁 像

を反してこれを観る。しかのみならず外面は連綿として杳
 なる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け力衰へず、
 能く見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を
 翹るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、地上に下るべく

騾



成氏朝臣 足利持氏の子。

鎌倉管領。後、下總に住
 みて古河公方と稱す。

横堀史在村 成氏の權臣

鶴



挿繪 馬琴畫像。

墨氏が飛鳶を云々 墨氏。

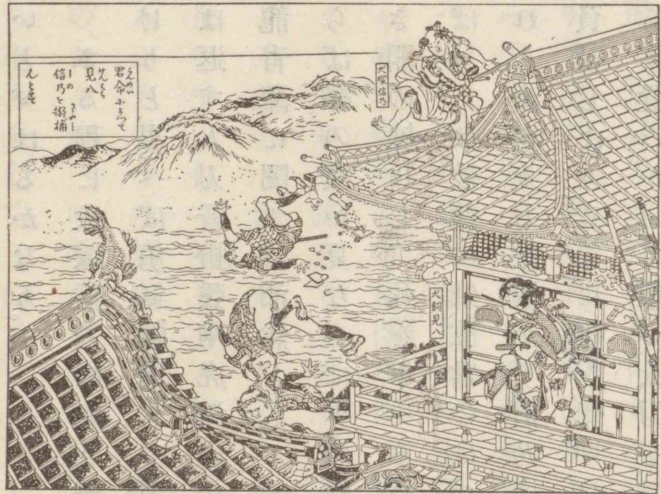
名は翠。周の學者。飛鳶
 のことは韓非子に「墨氏
 作木鳶、三年而成、飛一
 日、敗し」と。

魯般が云々 魯般、姓は公
 輸、名は般。周代の魯の
 人。雲の梯のことは、墨
 子に「公輸般爲雲梯、將
 以攻宋。」とあり。

もあらず。渠鳥ならずも網に入りぬ。獸ならずも狩場にあり。三寸息絶ゆれば、絆みな休まん。脱れ果てじと見えたりけり。其の時信乃思ふやう、初層・二層の屋の上まで、追ひ上らんとせし兵等を斫り落しつる。其の後は、絶えて近づく者なきに、今唯ひとり登り來ぬるは、世に覺えある力士ならん。這奴はこれ膳臣巴提便が、虎を暴にする勇あるか。また富田の三郎が、鹿の角を裂く力あるか。遮莫一個の敵なり。引つ組んで刺し違へ、死するに難きことやはある。よき敵にこそござんなれ。目に物見せん」と血刀を袴の稜もて推し拭ひ高瀬の如き方桴に、立つたる儘に寄するを待てば、見八も亦思ふ様、彼の犬塚が、武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとて、擲め兼ねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中より此の役儀に擇み出されしかひもなし。擲め捕るとも撃たるとも勝負

巴提便 欽明天皇の朝百濟に使し、雪夜幼兒の虎に喰はれしを憤り、虎穴を探りて虎を獲たり。
富田三郎 和田義盛の臣にして、將軍實朝の前にて長さ三尺七寸の鹿の角を二つ合はせて折れり。

を一時に決せんものを」と、思ひければ、些も擬議せず、御詫ご



こち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主従士

挿繪 芳流閣上の奮闘。



卒は手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいとゞはるかなり。

さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音掛聲、兩虎深山に挑む時、鏗然として風發り、龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる。いと高き閣の棟にして、死を争へる爲、體世に未曾有の晴わざなれば、見八は被籠の鎖、脇當のはづれを、裏缺くまでに切り裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痕を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を計りて、撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受け流して返す拳に付け入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みて、礮

と打つ、十手を丁と受け留むる、信乃が刃は鏢際より折れて遙に飛び失せつ。見八得たりと無手と組むを、そが儘左手に引き着けて、迭に利腕楚と取り、振ぢ倒さんと曳聲合して、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏み込らして、河邊の方へころ／＼と、身を輾ばせし覆車の米苞、阪より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる臺の勢、止るべくもあらざめれど、迭にとつたる手を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打ち累りつゝ、撞と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水烟、纜ちやうと張り断りて、射る矢の如き早河の、たゞ中へ吐き出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

〔南總里見八犬傳〕

被籠



弦當



〔参考〕
八犬士

- 大江新兵衛仁。
- 犬塚信乃成孝。
- 大阪下野胤智。
- 大村大學禮儀。
- 犬山道節忠興。
- 犬川長狭介義任。
- 犬飼見八信道。
- 犬田小文吾悌順。

一八 膏藥煉

二人 シテ 男 半袴、上下、腰帶

アド 男 同 右

下アトに膏藥の名譽なるはあるまいと思ふところに、聞けば、都にも名譽の膏藥があると申すほどに、この度都へ上り、膏藥を煉比べて見ようと存ずる。まづ、そろそろ上らう。

(道行) やれやれ、今日は天氣もよし、このやうな仕合せはない。やあ、殊の外寂しい。道連れもない。この處に待つてよからう。連も參つたら、同道いたさうと存ずる。

シテ「これは都に隠れもない膏藥煉でござる。某ほど膏藥の上手はあるまいと存ずるところに、聞けば、鎌倉方にも名譽

シテ 能狂言に於て、その曲一番の主人公。
アド 能狂言のわきし(脇師)。シテの相手をつとむ。

の膏藥があると申す。このたび鎌倉へ下り、膏藥を吸ひ合はせて見ようと存ずる。まづ、そろそろ參らう。

(道行) 今日道連れもなうて寂しうござる。

アド「やあ、いかう松脂臭うなつた。何事ぢや知らぬ。やあ、此處な者、この廣い街道を、何故に行當る。」

シテ「いや、其方が當つた。」

アド「何と其方は何方から何處へ行く。」

シテ「身どもはちと用事あつて鎌倉へゆくが、其方は何處へ行く人ぞ。」

アド「身どもは鎌倉方の膏藥煉ぢやが、身ども程の膏藥の上手はあるまいと思ふところに、聞けば、都にも膏藥の上手があると申すによつて、煉り比べて見ようと思つて上るところでおりやる。」

シテさては鎌倉の膏藥煉とは和御料がことか身どもも、其方が言ふ如く、鎌倉の膏藥煉のこと聞及んで、只今鎌倉へ下るところでおりやる。」

アトさてはさやうでおりやるか、何と某の膏藥には系圖があるが、和御料のにも系圖があるか。」

シテなるほど、此方にもある。其方から語つて聞かしやれ。」

アト心得た。語らう。よう聞かしませ。さて、昔、頼朝の御時に、生食、摺墨といふ名馬を召させられしに、何としてか、この生食が虚空をさして、とつて出た時に、御前なりし諸大名、やれ、あれを留めよ、留めよと仰せられたれども、誰あつて留むる人もなかつた。その時、某が先祖の祖父罷り出でて、その馬をこの膏藥にて留めて御目にかけてませうと申した。頼朝をはじめ諸大名、何として膏藥で留められうぞと仰せられ、一度

わごりよ 親しみて呼ぶ對象の代名詞。おまへ。

生食 源頼朝秘蔵の黒栗毛の名馬。宇治川の先陣争ひにては佐々木四郎高綱の乗用となる。
摺墨 同じく頼朝秘蔵の愛馬。宇治川合戦の時、梶原景季に與へたり。

にとつと笑はせられた。さりながら、留めさへするなら留めさせいと仰せ出された。畏まつて候と、先祖の祖父罷り出で、膏藥を指の腹に芥子粒ほど着け、息をほつとしかけ、かの駈ける馬に向つて、あの馬吸へ吸へと申したれば、何が、膏藥の強いに引かれて駈け出でたる馬がじたじたじたじた、じつと吸ひ寄つた。その時、頼朝を始め御前なる人々、さて、も名譽なることかな。何と、その膏藥には銘があるかと仰せられた。いやいや、何も銘はござらぬ。只、物を吸ふによつて吸膏藥とばかり申します。由、申し上ぐる。頼朝聞し召し、かほどの膏藥に銘がなうてはなるまい。銘を取らせうとあつて、馬を吸うたる膏藥なれば、鎌倉一の馬吸膏藥と下されて、よ、りこの方、某が膏藥は鎌倉に隠れはおりない。」

シテこれも餘程の系圖ぢや。さらば身どもが系圖を語つて

聞かさう。よう聞かしめ。」
アド「心得た。」
シテ「さて平相國淨海の御時、御庭を作らせられしに、立石なる石を、都の北山より、三千人して引いて参り、やうやう北の御門まで引寄せたれども、御門より内へ入ることがならなんだ。その時、某が先祖の祖父罷り出で、あの石を直したう思し召さば、處を指いて仰せつけられい。膏藥にて吸ひ寄せて御目にかけうと申した。その時、淨海を始め御前の人々、さてもさても大きな言をいふものかなと、一度にどつと笑はせられた。さりながら、直すならば、言ひつけ直させい。直さぬに於ては、曲事に言ひつけると仰せ出された。その時、先祖の祖父、畏まつて罷り出で、かの膏藥を透頂香ほど指の腹につけ、息をほつとしかけ、大石に向ひ、あの石吸へ吸へといひ

平相國淨海 清盛のこと。

曲事 處罰の意。

透頂香 外耶藥（ウキラウヤク）ともいふ。咳痰を治めるに效能ありと。

ければ、かの大石が膏藥に引かれて、じりじりじり、じつと吸ひ寄せられた。淨海をはじめ、各、さても不思議なる膏藥かな。何と銘があるかと問はせられた。いや、何とも銘はござらぬと申し上げければ、かほど名譽の膏藥に銘がなうては、叶ふまいと仰せられ、石を吸うたる膏藥なれば、天下一の石吸膏藥と下されてより、このかた、身どもの膏藥は天下に隠れがおりない。」

アド「眞にこれは餘程の系圖ぢや。互に劣らぬことぢや。いざ、この上は、藥味を明かして、吸ひ合はせて見ようか。」
シテ「それがよからう。何と和御料が藥味は何々が入るぞ。」
アド「されば、身どもの藥味は、むづかしい物がなかなか入る。まづ、地を走る雷、空を飛ぶ胴龜、木に生つた蛤、このやうな物が入るわ。」

シテそれはむづかしい物ぢや。身どもが薬味も色々大切な物が入る。白鳥赤犬の生膽、三足の蛙、このやうな物が入るわ。」

アドそれは大切な物ぢや。今などはあるまいが、何とおしやる。」

シテその事ぢや。今この薬味は求むる事がならぬ。先祖の祖父より求め置かれたを、只今まで少しづつ惜しみづかひにするわ。」

アドさうであらう。」

シテいざ膏薬を吸ひ合はせて見ようか。」

アド一段よからう。拵へさしませ。」

シテ鼻の先につけて吸ひ合はせう。何と、よいかよいか。」

アド拵へはよいぞ。さらば、ちと鎌倉へ引かうぞ。」

シテいやいや、引くことはなるまいぞ。さても、さても、強い膏薬ぢや。さらば、ちと都方へ引かうぞ。」

アドいやいや、都へはなるまいぞ。これは何とするぞ、何とするぞ。さても、さても、強い膏薬ぢや。これから鎌倉へ一引に引いてくれうぞ。」

シテいやいや、なるまいぞ。なるまいぞ。さても、さても、これも強い膏薬ぢや。それなら都方へ一引に引かうぞ。やあ、やあ、やあ。」

アドこれはならぬぞ。ならぬぞ。何とするぞ、何とするぞ。」

シテそりや、引きこかした。さあ、勝つたぞ、勝つたぞ。」

アドいやいや、今のは知れぬぞ。も一度勝負をせい。やるまいぞ、やるまいぞ。」

（續狂言記）

一九 狂文二篇

一、浮世

平賀源内

古人「春宵一刻價千金」と高値につもれば、また浮世を三分五厘と捨て賣りにする男もあり。然れども、春宵一刻に千金出して買ふたはけもなく、三分五厘に賣りてしまふ出来合ひの浮世もなし。いかに口から地代の出ぬものなればとて、出るまゝのいひたい事、つまるところは、よくもあしくもいひなし次第の浮世にて、浮世の定めなきは、人の心の定めなきなり。

—六々部集—

二、鍾馗の畫賛

石川雅望

大臣と稱すれども、隨身舎人も従へず。降魔の利劍ありな

平賀源内 名は國倫、號は風來山人。本草學者、戯作者。讃岐の人。安永八年(二四三九)歿、年五十七。
古人 宋の詩人蘇東坡。

石川雅望 號は六樹園、又、宿屋飯盛とも。江戸の人。國學者。狂歌・狂文に長ず。天保元年(二四九〇)歿、年七十八。

がら、鎮座せる社も見えず。顔に手足に朱をそゞぎて、ぬき身をとつて振りまはす。もし生酔かと思てあれば、かしは餅を引窓から覗く。下戸か上戸か分くべからぬ、文武兼備の進士の垂跡、げにちはやぶる紙幟、仰げばいよく、軒に高し。

鬼すまぬ我が大君の國なれば、ぬきもなし。あづまなまり、

道は古池の吟にひらけつ。

吟は枯野の夢にをはりぬ。水檜の木は月の笠ならねども、影を風雅の世にあふぐらむ。

(芭蕉翁像贊—横井也有)

ちはやぶる 神(かみ)の冠詞。
鍾馗 疫病を追ひ拂ふ神。唐の玄宗皇帝が夢に見しものを吳道子が及がきしに始まる。

横井也有 名は時般。名古屋の人。俳人。天明三年(二四四三)歿、年八十二。

二〇 民謡の話

島木 赤彦

日本民族には太古から日常の感情を歌謡にうつして、自ら口に歌ひ、且また對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謡の中で、或特別な形式を備へたものは移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るにこの萬葉集時代に緊張の頂點にまで達した短歌が、古今集以後の勅撰集に至つて、著しく弛緩の状態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生みだされた歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴族社會の玩物であつて、そのでき方も、緊張した

島木赤彦 本名久保田俊彦。長野縣の人。文學者。歌人。大正十五年歿、年五十一。

萬葉集 二十卷。舒明天皇朝より淳仁天皇朝まで、百三十年間の歌を集む。撰者及び撰定時代未詳。或は大伴家持の撰といふ。

古今集 二十卷。我が國最初の勅撰和歌集。醍醐天皇の延喜五年（一五六五）紀貫之等、勅を奉じて撰集す。

感情から生みだされるといふよりも、外形を整へるに苦心して作りだされたもので、内面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずに、却つて短歌の形を存してゐない。その當時の民謡に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生まれた短歌の精神が、民族的歌謡の一分流であるところの民謡に合流してゐるといふことは、決して不自然ではない。

この事は、勅撰集時代のその背後に存してゐたと思はれる神樂歌や、催馬樂歌などの中に現れてゐる民謡を檢べて見れば、容易にうなづくことができるのである。

笹分けば袖こそ破れめ利根川の石は踏むともいざ河原より。(神樂歌)

勅撰集時代 醍醐天皇の延喜五年（一五六五）勅して古今和歌集を撰せしめられし頃より、後花園天皇の永享十年（一〇九八）の新編古今集（最終の勅撰集）までの間、約五百三十餘年をいふ。

神樂歌 神樂に和してうたふ歌。

催馬樂 雅樂の一。初め上代の民謡にて、馬方のうたひしもの、平安朝以後、歌曲となせり。

澤田川、袖漬くばかり浅けれど、はれ、浅けれど、

久邇の宮人高橋渡す、あはれ、其處よしや、

高橋渡す。(催馬樂)

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謡から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以つて、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。そしてこの民謡の系統は、足利徳川の各時代を経て、順次に發達推移して、今日に及んでゐるのである。

然らばそれ等の民謡の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に産みだした側々として人の心を動かす力をもつ情調である。農民の唄ふ歌謡には、のん氣に似て、その底には重々しい調子が籠つてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊の遣る瀬ない哀

音が籠つてゐる。

乳が崎沖まぢや見送りまじよが、

それから先は神だのみ。

の唄の如き、必ずしも船唄とばかりはいへぬが、海中の孤島に頼りなく住む人々の心理が、「神だのみ」の哀音となつて現れてゐる純粹さを味はふべきである。

浅間の煙が北へと靡く、

今宵泊らにや雨になる。

一誦して浅間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかるではないか。浅間の裾野には追分の宿場があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中仙道の旅人の一夜の泊場であつた。その宿引の女が旅人を呼びとめて、一宿を勧める心がこの歌の心

澤田川 山城國(京都府)相樂郡にあり。

久邇 聖武天皇、天平十二年(四〇〇)十二月都を平城(ナラ)より遷して、同十六年正月、難波宮に遷り給ふまでの都。今の相樂郡の木津町・加茂町・上狛町・瓶原町地方一帯の地。

乳が崎 伊豆七島中、大島の西北端。

浅間 長野縣と群馬縣との境にある活火山。

碓氷越 碓氷峠を越えること。碓氷峠は、浅間山の東南にて、同じく長野・群馬兩縣の境にあり。

追分 長野縣北佐久郡の地名。今、西長倉村と改む。もと、中仙道と善光寺道との分岐點。

坂本 群馬縣碓氷郡の町名。碓氷峠の東麓。

中仙道 東山道を経て、東京より京都に行く街道。

はせると、民謡と地方との關係をほゞ推測することができよう。たゞ民謡の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少なくない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れて行はれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れてくる。例へば、麥ついての歌は甲斐の南方では、

大麥ついて、麥ついて、お手にまみよ九つ。
九つのまみよ見れば、親の在所こひしよ。

と唄うてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味ははれる。

この苗をとりあげてどこに棲まずや。
いなごや、きりすすきすすき葦の、

まみよ「まめな」の訛。

こやのうらに棲まずや。

これは伊豆の南方の稻生澤村の苗取唄である。思ふにこの歌謡は、決して近代のものではない。少なくとも平安時代か、或はそれ以前に生まれたものが、その優れた秀でた調子をもつが爲に、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち満ちてゐる。この美しい心情をもつた民謡が、今日の日本に残つてゐて、現在農夫の口に歌はれてゐることは、民族の誇とすゝるに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つた薄や結きあんだ葦の小屋の中に、自分と共に住まないか。」といふその心は、何といふ單純な、同情のこもつた、愛に満ちた心であらう。自然の中に愛に包まれて、その日の労働をい

稻生澤村 静岡縣賀茂郡下田町の近傍。

をしみながらも、一匹の蟲にも親しい心をもつ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。この苗をとりあげて、「は、原作は勿論、この稻を刈りあげて、であつて、それが苗取歌に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも残つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越して、
 三の坂越しや強清水。
 これは信濃國の民謡中、出色の一である。草刈馬に乗つて、八ヶ嶽の裾野を上る。一の坂がある。二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの強清水が湧いてゐる。」といふ意で、草刈の男女に唄はれることによつてこの唄の趣

八ヶ嶽 長野・山梨兩縣に跨がる火山。

が深い。そして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖かいが、山國の明るさは寒い。それが、これ等の民謡の中にも現れてゐるのである。

民謡は、民族の歌謡である。いふまでもなくその時代時代に於ける民族固有の、而もなほ普遍的な生活感情を表現することに、民謡の眞率性と素朴性がある。民謡の歌と形態とは常に時代に順應し、その眞髓に於ては古今を通じて一貫した民族の精神を精神としてゐる。日本民謡の淵源は遙かに神代にある。而して古來の日本民謡は極めて純正なる土俗の野調であり、民衆と郷土との聲であつた。

(日本文學大辭典)

二 諺

藤井乙男

藤井乙男 紫影と號す。兵庫縣の人。明治元年生る。國文學者。文學博士。京都帝國大學名譽教授。

格言は、賢哲の垂訓にして、俚諺は、凡俗の信條なり。前者は明かにその立言者を求め得べく、後者は輿衆の聲にして、その作者を知るべからず。隨うてその發生の時期を精確に定めんこと頗る難しと雖も、多數の俚諺中には、間、その發生の時期前後、新古の關係、變遷等を推測するを得べきものなきにしもあらず。

吾人が座談・演說等に日常使用する多數の諺は、吾人の祖先より知識的・道德的遺産の一部分として繼承せるものにて、吾人が新たに製作したる物にあらず。有史以來、世々の人類が内外諸種の天然・人事に遭遇し、物に觸れ事に感じ、或は觀察し、或は考慮し、或は感激し、喜怒哀樂種々、雜多の經驗を

積みて人生に普通なる知識を得得して、後世子孫に遺せる者、これ即ち今日行はるゝ諺の多數なり。手輕にして愛用し易きが爲に滅亡の非運を免れし古知識の斷片なり。とは、二千年の昔、俚諺研究の率先者アリストテレス既に之をいへり。トレンチは、その俗諺論に於て「今日文明諸國の共有財産とも稱すべき諺は、各國民が祖先傳來の遺産にして、或は口口に語り繼ぎ、或は前代の記者によりて後世に書き傳へられて希臘・拉典の古きより、中世の諺に至るまで依然として今日に存し、諸國に行はる。されば、近き世に起りたる諺ならんと一般に信ぜらるゝものにして、その淵源の極めて悠長なるを發見すること少なからず」といへり。現今行はるゝ我が國の諺にも、その發生時代の頗る遠きものあり。痛む上に鹽塗る。「重荷に小づけ」の如きは既に萬葉集に見え、「一升枿

アリストテレス

Aristoteles. (西紀前 384-322) 希臘の哲學者。

トレンチ

R. C. Trench (1807-1886) 英國の宗教家。言語學者。詩人。

拉典

Latin 古代ローマ。

に二升は入らぬ。」といふは枕草紙に出で、「死ぬる子みめよし。」飯粒で鯛釣る。」といふは共に早く土佐日記に見えたり。此等が孰れも千年内外の歴史を有するものならんとは、この諺を口にする人々のなべて豫想せざる所なるべく、今日にては既に之を徴すべきものなしと雖も、その淵源の遠きこと前者に相譲らざるもの尙多かるべし。降りて鎌倉時代より室町時代に及べば、現代のものと同なる諺の數、次第に多くなりゆくはいふ迄もなき事にて、鎌倉室町時代の載籍を通讀せし者の容易に認め得る所なり。

祖先傳來の他に、外國より輸入せられたる諺あり。時としては、彼我相交換して、雙方同時に行はるゝより、孰れが借主にして、孰れが貸主なるか、容易に判別し難きもの亦少なからず。四面海を環らし、海東に屹峙せる我が國は、歐洲諸國の

枕草紙 清少納言の隨筆。
土佐日記 紀貫之が土佐國守の任滿ちて歸京せし時の海路の紀行。

如く他國との交通自由ならず、人種言語の關係も、亦彼の如くならざるより、他國と諺を貸借交換して、その本主の誰なるかを判ずるに苦しむが如き患少なしと雖も、支那朝鮮との交通夙に開け、儒佛の教深く民俗に染みしより、内外典より來れる諺甚だ多く、一見して外國將來たるを認むべき者の他に、衣服外觀は純然たる國風ながら、なほその正體は儒佛にみならずやと疑はるゝもの往々これあり。殊に僧徒は、布教の必要上經文中の金言を俗釋して、眼に一丁字なき善男、善女を教化するより、その傳播極めて早く、廣く諺として世上に流布するに至る。合はせものは離れもの。仰向きて唾はく。蛙の面に水。鹿の角を蜂が螫す。の如き、巧みに日本化せられたり。渴すれども盜泉の水を飲まず。麒麟も老いては驚馬に劣る。の類は、何人も一見して國産にあらざるを知ら

合はせものは云々 盛必有衰、合會有別離。(涅槃經)
仰向きて云々 惡人害賢者、猶仰天而唾。(四十二章經)
蛙の面云々 蛙面水。(禪林句集)
鹿の角云々 鹿角蜂。(禪林句集)
渴すれども云々 渴不飲盜泉之水、熱不息、惡木之蔭。(文選)
麒麟も云々 麒麟之衰也、驚馬先之。(戰國策)

るべきも、麻につる、蓬。井の中の蛙。情に刃向かふ刃なし。の如き極めて通俗にして平易なるものが、信偏なる儒教の語に胚胎せしものは誰か思ふべき。壁に耳。といふも古き諺なれど、既に詩經に「君子無易由言耳屬于垣」の語あり。拉典にも同一の諺ありて、それより汎く今日の歐洲諸國に分布せり。

維新後、西洋諸國との交通盛んにして、外國語を學ぶ者多きに隨ひ、外國の諺の輸入せられしもの、またこれあり。時は金。習慣は第二の天性。二兎を追ふ者は一兎をも獲ず。などの類、即ち是なり。尙又人の社會に立つや、生活上絶えず新經驗に遭遇し、知識上に道德上に、新たなる自家の確信を生ずるや、その經驗的所見を發表するに一種の文句を以てす。而して、その文句にして、幸に諺たり得べき資格を具備する

麻につる、云々 蓬生^{スレバ}麻中^ニ、不^レ扶^レ而直^ス。(荀子) 井の中の蛙 井^ニ龍^{不^レ可^シ}以^テ語^ル於^レ海^ニ者、拘^ル於^レ虛^ニ也。(莊子)

情に刃云々 仁者無^レ敵。(孟子)

時は金

Time is money.

習慣は云々

Custom is a second nature.

二兎を云々

He who pursues two hares, catches neither.

時は、一般國民の賛同を博し、遂に諺として成立すべき權利を享有するに至る。

一國の俚諺は、生々蕃殖して窮期なきと共に、一方舊く行はれて、既に國民の記憶を去りたるものはた少なからず。此の如く、舊を忘れ新を迎へて、俚諺は時代と共に増減變遷するものなり。

古來の典籍殊にその通俗的なるものは幾多の諺をその中に採録含蓄するのみならず、書中の佳句妙章は、往々世人に裁斷割取せられて、恰も本來の諺なるかの如く使用せられ、時としては、漸次その語句を變更して、諺としての使用に便利ならしむる餘り、一見その出所を辨知し難きまで、相貌を變ずるに至ることあり。和歌俳諧俗歌の類は、その形體短小にして引用にも記憶にも便利なるを以て、諺の如く使用

せらるゝもの多し。和歌より來れるものは例へば、山川の末に流るゝ椽がらも、思ふこと一つ叶へば又二つ、三つ四ついつもむつかしの世や、の如き、又、連歌の附句、及び俳句、川柳より來れるものは例へば、

草の名も所によりて變るなり

浪花の蘆は伊勢の濱荻 救濟

物いへば脣寒し 秋の風 芭蕉

百なりや蔓一すぢの心より 千代

化物の正體見たり 枯尾花 有

世の中は三日見ぬ間の櫻かな 太

山川の云々 空也上人繪詞傳に見ゆ。

思ふこと云々 後水尾天皇の御製なりといふ。

救濟 室町時代の人。連歌を以て名あり。二條良基の師。

千代 加賀の人。安永四年(二四三五)歿す。

也 横井氏、尾張の人。天明三年(二四四三)歿。年八十二。

蓼太 大島氏、江戸の人。

天明七年(二四四七)歿。年八十。

大男總身に智慧がまはりかね 孝行をしたい時には親がなし の如きものは是なり。

訓誡の意を含み、又は道義上の譬喩に供すべき詩歌俳句が諺として用ゐらるゝのみならず、偉人名士の語は、直ちに當時の人口に膾炙し、永く後世に傳誦せられて、俗諺と伍を同じうするに至る。孔孟釋迦などの金言の如きはいふも更なり、王彦章が「豹死留皮、人死留名」といひ、歷山大王が波斯の大軍來り襲はんとするを聞き、自若として「屠兒、千羊を恐れず」といひ、家康が「五字七字の戒、うへをみなみのほどをしれ」の如き、一たび此等偉人傑士の口頭を出づれば、忽ち千萬人の間に傳唱通用せられ、永く世の諺となりて滅びず。定家が「和歌に師匠なし」と教へ、芭蕉が之に倣ひて「俳諧に古人な

王彦章 梁の人、字は子名。歷山大王

Alexander the Great (西紀前 356—323)

マケドニア王。

定家 藤原俊成の子。鎌倉時代の歌人。仁治二年(一九〇一)歿。「和歌に師なし」の語は詠歌大概に出てゐる。

し。」と唱へたるが如き、前數者に比して適用の範圍稍狭しと雖も、名人の一語、世上の諺となるに至つてはその揆一のみ。諺は、通俗をむねとすれども、必ずしも、凡人庸流の口にのみ出づと斷ずべからず。寧ろ世故に長け、機智に富み、才識時俗を抜くこと一頭地なる者にして始めて、痛切警拔なる人生の批評諷刺を擅にし得べきを記憶せざるべからず。武士は食はねど高楊枝。花は櫻木、人は武士。」と高く標置し、馬方船頭、お乳の人。「商人の空誓文。」と罵倒したるが如き、その立言者の地位如何を察するに難からざるなり。

詩歌格言等より來れる諺は、その發生の緣由一目瞭然たれども、此の如きは無數の俚諺中、極めて小部分にして、その大多數は、何時如何にして生ぜしか、生誕の時日もその父母も漠として知るべからざること、恰も車馬喧鬧の十字街頭

に置き去りにせられたる棄兒の如し。幸にして、この兒愛敬ありて人なつこく、機轉利きたるより、衆人の愛顧を得、饑ゑず凍ゑず、無事に成長して世間に重寶がらるれども、人も我もその來歴如何を知る能はざるは、依然として、少しもありし昔に異ならざるなり。されば諺の起源として世に傳へらるゝ話柄は、信據すべきもの極めて少なく、諺の起源といはんよりは、寧ろ諺の爲に後日想像附會せしにあらずやと疑はるゝもの、十の七八なり。ざるを強ひて、之が起源を求めんとするは、猶棄子の系圖を作るが如く所謂骨折損の草臥儲たること多かるべし。

〔改訂中等國文〕

三 文學と人生

二三 文學と人生

小泉 八雲

小泉八雲 英國人。ラファ
ディオ・ヘーン。Lafca-
dio Hearn(1850-1904)
我國に歸化して小泉八雲
と改む。元東京帝國大學
教師。明治三十七年歿、
年五十五。



らである。

書物の價值は、それを一度讀んで満足するか、更に繰返し

幾百年間の人類の意見の蓄積によるのである。それは洗煉
といふものは、所謂批評家によつて作られるものではない。
された批評家の意見のやうに鋭く
もなく、明瞭でもない。しかもこれほ
ど確かな判断はないといふのは、そ
れが非常に廣大な經驗の結晶だか

挿繪 小泉八雲。

て讀みたくなるかで定まる。眞の良書は、最初讀んだ時より
も二度目には一層心が惹かれ、讀返す度に新しい意義と美
とを見出すものである。教養あり趣味ある人が、二度と讀む
氣にならないやうな書物は、大したものではない。假令千萬
の讀者に購はれようとも、二度と讀まれないやうな書物は、
淺薄なものか、まやかしものかである。併し又、一個人の判断
を絶對に間違ひないものと考へる譯にも行かない。一流の
批評家にも往々鑑識の鈍りも曇りもある。たゞ累代の公衆
の判断に至つては、疑の餘地がない。一讀しただけでは、何處
がよいとも思へないやうでも、數百年來名著とされて來た
書物には、きつと成程と思はれる處がある。時の試験に合格
した、このやうな大傑作だけが、眞に藏書とするにふさはし
いものである。

ヒル曰く「再度以上讀破す
ることを欲せざる書は讀
むことなかれ。」
エマアスン曰く「有名なら
ぬものは讀むことなか
れ。」又曰く「一年を経ざ
る著作は讀むことなか
れ。」

「二度以上読みたいと思ふ書物だけを買へ。それ以外のものは、特別の理由がない限り買はないがよい。」これが書物選擇の標準である。

かういふ大傑作に含まれてゐる價値は普遍的なものである。大傑作は直ちに青年に感動を與へるものではない。初はたゞ表面の意味や筋が面白いだけであるが、讀者が人生の經驗を積むに従つて、次第にその書の新しい意味が見えて來るものである。十八の時面白いと思つたものは、二十五では一層面白い。三十になつては全然新しい書物に見え、四十にしては、何故今までこれ程の美しさが分らなかつたかと驚く。五十・六十になつても同じ様なことが繰返される。傑れた書物は讀者の心の成長に伴なつて成長する。シェイクスピアや、ダンテや、ゲーテの作物の偉さは、實にこゝにある。

シェイクスピア Shakespeare (1564-1616) 英國の劇詩人。
ダンテ Dante (1265-1321) イタリアの詩人。
ゲーテ Goethe (1749-1832) 獨逸の詩人・戯曲作者。

これについて、ゲーテにはよい例がある。彼は短篇の物語をいくつも書いたが、子供にはそれがお伽噺のやうに面白かつた。青年には嚴肅な讀物となつた。中年の者はその中の一字一句にも非常に深い意味を悟り、老人はそこに全世界の哲學と人間の智慧とを見出した。つまり讀者の頭が勝れてゐれば、あるだけ、人生を知つてゐれば、あるだけ、作者の偉さが分るのである。

が、これは作者が自分の作品のもつてゐる廣さや、深さを承知して書いたものではない。勝れた天分は、自ら偉大だなどとはつゆ知らずに、無意識に働くものである。そして作者の天分が大なれば大なるほど、それを自覺する機會は少い。なぜなら、偉大な天分ほど公衆は理解するのに長年月を要するからである。

何千年の昔、アラビアの或漂浪者が夜空の星を眺め、人間と、この世を作つた見えざるものとの關係に心を打たれて、その心情を歌つたものが、今なほヨブ記の中に傳はつてゐる。爾來天文學の進歩は、我々に三千萬の太陽があつて、それには各若干の遊星があるであらうことを教へてゐる。現在の望遠鏡では約三億の他の世界が見える。恐らく是等の世界の内には、智的生物の棲んでゐるのも多からう。火星には我々の文明よりも更に進んだ文明があるといふ證明さへ得られさうである。我々の宇宙の概念とヨブのそれとは、實に霄壤の相違である。しかも、その單純な詩は、それがために一毫もその美と價值とを失はないのみならず新しい天文學上の發見のある毎に、ヨブの言葉は我々の記憶に新たになる。これはたゞ彼が勝れた詩人で、三千年の古人の心に宿

ヨブ記 舊約全書中の一篇。舊約全書はキリスト降誕以前の記事を集めし猶太民族及び基督教の聖經。三十九篇あり、その内容は、法律・歴史・詩歌・豫言の四部に分たる。

つた眞理をさながらに語つてゐるからである。

アンデルゼンは、道德的眞理や人生の悟は短いお伽噺や童話で教へるに限るといふ考から、古い話を元にして澤山の新しい面白い話を作つた。その書が今日ではどこの圖書館にも備へつけられ、子供よりも大人に讀まれる方が多い。その中に人魚の話がある。一體人魚などといふものはあるものではない。見やうによつては馬鹿げた話であるが、この話の中に現れてゐる無私愛・忠誠の感情は不滅である。讀者はその美に打たれて、話の筋の架空なことなどは忘れて了つて、たゞ永遠の眞理を見るのである。

かういふ傑作の中から、自分の爲には何を選定したらよいか。先年英國の科學者ラボックが世界名著百篇を表にしたことがあつた。それを或書肆が廉價本にして出

アンデルゼン And. Isen (1833-1875) デンマークの小説家・詩人。お伽噺作家として名あり。

ラボック Labouck (1803-1865) イギリスの科學者・政治家。

版した。すると、他の文學者にも、之に倣つて各、信ずる處に從つて、他の百の名著を選出するものが出た。それからもう大分時が經つて、この企は何の役にも立たなかつたことが分つて來た。この叢書を購つた人は多いだらうが、讀んだ人は殆どない。これはラポックの選擇が悪いのではなく、一人の人が、銘々異なつた心をもつてゐる多數の人の讀書の課程を決めるといふことが、無理だからである。ラポックは自分に最も感銘の深かつた書物を舉げたに過ぎない。他の文學者がやつたら、きつと彼のとは違つた表を作つたらうと思ふ。書物の選定は、如何なる場合にも個人的でなければならぬ。約言すれば、諸子は自分の眼によつて、自分で選定しなければならぬのである。自分の性格を知りつくし、それに十分の同情をもつてゐてくれない限り、他人に自分の天分

エマアスン曰く「嗜好に適合せるものは讀むことなかれ。」

が奈邊にあるかを定めて貰ふわけにはゆかない。併し、こゝに一つ容易に出来ることがある。それは先づ第一に、今までどんな題目が一番自分に氣に入つたかを決定することである。第二に、その題目のもので何が一番良いかを決定し、次には同じ題目を取扱つてゐると稱してはゐるが、未だ大批評家や大公衆に定評のない場あたりのものを除外して、最良のものに没頭することである。しかし、さういふ定評のある書物は澤山にあるものではない。凡て、大宗教の教理を書いた經典は、文學的にも第一級に位するものである。それは彫琢に彫琢を重ねて、その國語では出來得る限り立派なものに仕上げてあるからである。諸民族の理想を表現した敘事詩も亦、第一級に價する。第三には人生の反映としての戯曲の傑作も、最高の文學に入れてよい。併し、優秀なものは

エマアスン曰く「書を讀まば最も適當なるもののみを讀むべし。さらぬ群書の涉獵に記憶力を徒費することなかれ。」

敘事詩 作者自身の感想・議論を露出せずして、自然・事件・性格を客觀的に叙述したる詩。更に廣義

ダイヤモンドのやうなもので、さらにあるものではない。最後に私は年若い讀者に、陳腐ではあるが、非常にすぐれた格言を繰返したいと思ふ。それは、新刊書の出版を聞く毎に古い書を読み、といふことである。(Life and Literature)

夏の日の暮れ難きをも知らず、冬の夜の長きをも覺えぬは、書見る心の樂しさになむありける。さるは道々しき筋のは更なり、家々に記せる何くれの書、又假初の筆ずさびなど、唐大和、古今といと様々多かる中に、わが立てたる筋ならぬも、見もてゆくまゝにはえうある事どもありて、かにかくにあかず面白く樂しきは書にしくもの又無かりけり。遠き世のを見る程は、我もその世にある心地して、やがてその人々を友となして、打語らふ心地さへせらるゝを、我も筆とりてよしなしごとども書きつくるが、偶もちりぼひ残りて、後の人はた我を友とせむには、千年の末にさへ知る人ある心地して、いとをかしくなむ覺ゆる。萬づの心やれるわざ、いとさはなれど、唯一人居てあかず樂しきは、書の他に又何かはあらむ。あるが上にもあらまほしきは書なりけり。(本居宣長)

にはかゝる題材を描寫せる叙事的文學一般。戯曲の構成は敘詩の基礎に立つ。しかも作中の人物の科白は抒情思惟的要素を含み、又舞臺藝術としては種々の藝術的要素を攝取せる綜合藝術なり。

本居宣長 鈴の屋と號す。國學者。享和元年(二四六一)歿、年七十二。

二三 昔ものがたり上

一、武 勇

賴光朝臣、寒夜に物へありきて歸りけるに、賴信の家近くよりたれば、公時を使にて、「たゞ今こそ罷り過ぎ侍れ。この寒さこそ、はしたなけれ。美酒侍るや」といひたりければ、賴信朝臣、折ふし酒飲みて居たりける時なりければ、興に入りて、「ただ今見んやうに申し給ふべし。この仰ごとによるこび思う給へ候。御渡りあるべし」といひければ、賴光則ち入りにけり。盃酌の間、賴光既の方を見やりたりければ、童を一人縛めておきたりけり。あやしと見て、賴信に「あれにいましめておきたるものは誰ぞ」と問ひければ、「鬼同丸なり」と答ふ。賴光驚きて、「いかに鬼同丸などを、あれていには縛め置き給ひたる

賴光 源滿仲の長子。圓融・華山・二條・三條・後一條の五朝に歴事し、攝津・伊豫・美濃等の國守を歴任す。武將として英武驍勇、最も射技に長ず。治安元年(一六八一)歿す。
賴信 賴光の弟。
公時 坂田氏。賴光四天王の一。賴光四天王とは、公時の外に、渡邊綱・碓井貞光・卜部秀武。

鬼同丸 一條天皇の頃の惡少年。

ぞ。犯しあるものならば、かくほどあだにはあるまじきものを。」といはれければ、頼信「げにさる事にて候。」とて、郎等呼びて、猶したゝかにいましめさせければ、金鎖をとりいでて、能く逃げぬやうにしたゝめけり。鬼同丸、頼光の宣ふ事を聞くより、口惜しきものかな、何ともあれ、今宵のうちにこの恨みをばむくはんずるものを、と思ひ居たりけり。盃酌數獻になりて、頼光も酔ひて臥しぬ。頼信も入りにけり。夜更けしづまる程に、鬼同丸究竟のものにて、いましめたる繩、金鎖ふみ切りて遁れ出でぬ。狐戸より入りて、頼光の寝たる上の天井にあり。この天井引きはなちて落ち懸りなば、勝負すべきこと異儀あらじと思ひためらふ程に、頼光も、たゞ人にあらねば早くさとりにけり。落ち懸りなば大事と思ひて、天井に、馳よりも大きに、貂よりも小さきものの音こそすれ。」といひて、

鞍馬 京都市の北方。
綱 四天王の一、渡邊綱。

「誰かさぶらふ。」と呼びければ、綱、名のりて参りにけり。「明日は、鞍馬へ参るべし。いまだ夜をこめて、これよりやがて参らんずるぞ。某々供すべし。」といはれければ、綱承りて、皆これに候。」と申してゐたり。鬼同丸この事を聞きて、こゝにては今は叶ふまじ、酔ひ臥したらばとこそ思ひつれ、なまさかしき事し出でては悪しかりなんと、思ひて、明日の鞍馬の道にてこそと思ひかへして、天井をのがれ出でて、鞍馬のかたへ向ひて、市原野の邊にて、便宜の所を求むるに、立ちかくるべき所なし。野飼ひの牛のあまたありける中に、殊に大きなるを殺して、路頭に引き臥せて、牛の腹をかき破りて、その中に入りて、目ばかり見出だして待ちにけり。頼光、案の如く來りけり。淨衣に太刀をぞ佩きたりける。綱、公時、貞光、季武等皆供にありけり。頼光馬をひかへて、野の景色興あり。牛その數あり。お

のおの牛追ふものあらばや」といはれければ、四天王のともがら、我も我もとかけて射けり。誠に興ありてぞ見えける。その中に、綱いかゞ思ひけん、とがり箭をぬきて、死にたる牛に向ひて弓を引きけり。人あやしと見る所に、牛の腹のほどをさして、矢を放ちたるに、死にたる牛、ゆすくとはたらきて、腹の裡より大の童打刀をぬきて走り出でて、頼光にかゝりけり。見れば鬼同丸なりけり。矢を射立てられながら、なほ事ともせず、敵に向ひけり。頼光は少しもさわがず、太刀を抜き、鬼同丸が頭をうち落してけり。やがても倒れず、打刀をぬきて、鞍の前つ輪せめてつきたり。さて頭はむながひに喰ひつきたりけるとなん。死ぬるまで、猛くいかめしう侍りけるよし、語り傳へたり。まことなることにや。

―古今著聞集―

古今著聞集 二十卷 橋成季の撰

二、鳥羽僧正

鳥羽僧正は、近き世には、並びなき繪かきなり。法勝寺の金堂の扉の繪かきたる人なり。いつほどのことにか、供米不法のことありける時、辻風の吹きたるに、米の俵を多く吹上げたるが、塵灰の如くに空にあがるを、大童子法師ばら走りよりに取りとゞめんとしたるを、さまざまにおもしろう筆を揮ひて書かれたりけるを、誰かしたりけん、その繪を院御覽じて、御入興ありけり。その心を、僧正にお尋ねありければ、あまりに供米不法に候ひて、實のものは入り候はで、糟糠のみ入りて、軽く候ゆゑに、辻風に吹き上げられ候を、さりとては、小法師ばらが取りとゞめんとし候が、をかしう候を、書きて候。と申されければ、比興のことなりとて、それより供米の沙汰厳しくなりて、不法のことなかりけり。―古今著聞集―

鳥羽僧正

大僧正覺猷。宇治大納言源隆國の子。天台座主又は三井寺の長吏となり、後に鳥羽に住す。故に鳥羽僧正の名あり。戲畫に長ず。後世、その畫風を鳥羽繪といふ。保延六年(一八〇〇)寂、年八十八。
法勝寺 天台宗。京都市の東郊、白川の北にあり。白河天皇の創建。

院 鳥羽法皇(第七十四代)。

二四 昔ものがたり下

一、能因法師

能因入道、伊豫守實綱に伴ひて彼の國に下りけるに、夏の初、日久しく照りて、民の歎あさからざりけるに、神は和歌にめで給ふものなり、試に詠みて三島に奉るべき由を國司頼りにすゝめければ、

天の川苗代水にせきくだせ

天降ります神ならば神

と詠みて、みてぐらに書きて神司して申し上げさせたりければ、炎旱の天俄に曇り渡りて、大なる雨降りて、枯れたる稻葉おしなべて緑にかへりにけり。忽ちに天災をやはらぐること、唐の貞觀のみかどの蝗を吞めりし政にも劣らざり

能因入道 俗名橘永愷(ナカヤス)。白河天皇の御代の歌僧。

伊豫守實綱 日野資成の子。藤原姓。

三島 國幣中社三島神社。伊豫國(愛媛縣)宇摩郡三島町にあり。

天の川云々 金葉集雜の部に出づ。

唐の貞觀のみかどの云々

唐の太宗、蝗蟲の百姓を害するを憂へ、蝗數匹を吞み、災を己の身に移せしといふ故事。貞觀政要に出づ。

けり。

能因は至れるすき者なり。

都をば霞とともに立ちしかど

あき風ぞふく白河の關

と詠めりけるを、都にありながらこの歌を出さん、無念と思ひて、人にも知られず、久しく籠りあて、色を黒く日にあぶりなして後、みちのくの方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。

二、松葉仙人

河内國金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦しみなし。よく食ひおほせつれば、仙人ともなりて飛びありく。といふ人ありけるを聞き、松の葉を好み食ふまことに食ひやおほせたりけん、五穀

都をば云々 後拾遺集羈旅の部に出づ。

河内國金剛寺 今、大阪府南河内郡天野村にあり。眞言宗。行基の開創。

の類食ひのきて、漸く兩三年になりにはるに、げにも身も輕
 くなる心地はければ、弟子どもにも、我は仙人になりなれと
 するなり」と常はひひて、今々まで、内々にて身を飛びならひ
 などしはり、既に飛びでせりなれ」といひて、坊も何も弟子ど
 もに分ち譲りて、上りなば仙衣を着るべし」とて、かたの如く
 腰に物をひとへ巻きて出で立つに、我が身にはこれより外
 ば入るべきものなし」とて、年比祕藏して持ちたりける水瓶
 ばかりを腰につけて、既に出でにけり。
 弟子、同朋なごり惜しみ悲しび、聞き及ぶ人遠近市の如く
 に集りて、仙に登る人見んとてつどひたりけるに、この僧、片
 山のそばに差し出でたるいはほの上へのぼりぬ。一度に空
 へのぼりなんと思へども、近く先づ遊びて、事のやう人々に
 見せ、たてまつらんとて、かの巖の上より下に生ひたりける

松の枝にゐて遊ばん」といひて、谷より生ひのぼりたる松の
 上、四五丈ばかりありけるを、さかさまに飛ぶ。人々目をすま
 し哀れをうかべたるに、いかゞしつらん、心や臆したりけん。
 かねて思ひしよりも、身重く力うき／＼として弱りにけれ
 ば、飛びはづして谷へ落ち入りぬ。人々淺ましく見れども、こ
 れほどのことなればやうあらん、定めて飛び上らんずら
 と見るほどに、谷の底の巖にあたりて水瓶も割れ、また我が
 身も散々に打ち損じて、たゞ死にに死にぬれば、弟子眷屬騒
 ぎ寄りて、「いかに」と問へば、いらへもせず、僅に息の通ふか
 りなりけれど、とかくして坊へ昇き入れつ。こゝに集れる人
 笑ひのゝしりて歸りけり。
 食さて、この僧、あるにもあらぬ様にて痛み臥せり。とかくい
 ふばかりなくて、弟子も恥かしながらあつかふあひだ、松の

葉ばかりにては命生くべくも見えねば、としごろいみじく食ひのきつる五穀をもて、さまざまいたはり養へば、命ばかりは生くれども、足、手、腰も打ち折りて、起居もえせず。今は松の葉食ふにもおよばず、もとの如く五穀むさぼり食ひて、弟子どもにゆゑしく譲りたりし坊も、實も取り返して、かまわりむたり。

十訓抄

- 第一、可^キ空^ク心^シ操^ス振^ル舞^フ事。
- 第二、可^キ離^ル橋^ノ慢^ノ事。
- 第三、不可^カ侮^ル人^ノ倫^ノ事。
- 第四、可^キ誠^ム人^ノ上^ノ多^ク言^フ事。
- 第五、可^キ撰^ル朋^友事。
- 第六、可^キ存^ス忠^ニ信^ニ廉^直事。
- 第七、可^キ專^ス思^慮事。
- 第八、可^キ堪^ル忍^ル于^諸事^ニ事。
- 第九、可^キ停^ム懇^望事。
- 第十、可^キ庶^シ幾^ク才^能藝^業事。

十訓抄 三卷。作者未詳。

二五 日本民族の覺悟

田中寬一

日本民族の前途は洋々として希望に満ちてゐる。然しそれは可能性である。この可能性を實現するには、民族の各員の思慮と努力とを必要とする。決して單に日本民族の優越性を自負したり、外國人の言動を摸倣したりするだけでは實現は出來ない。日本民族の大使命を自覺し、その實現に向つて精進することによつてのみ達し得られる。フイエは歐洲各民族について考察して、最後に結論として、未來はアングロサクソンのものでもなく、獨逸人のものでもなく、希臘人のものでもなく、將又ラテン人のものでもない。最も聰明で、勤勉で、且最も道德的なものの掌中に歸すべきである」といつてゐる。日本民族の將來を思ふものは、當

田中寬一 明治十三年、岡山縣に生る。心理學者。文學博士。東京文理科大学教授。東京高等師範學校教授。

フイエ フランスの哲學者。西曆 1883—1912)
アングロサクソン

Anglo-Saxons 第五世紀頃、ドイツの西北部から英國に渡つて、今日の英人の先祖となりし種族。こゝでは、「英國人」の意に用う。

にこの至言を服膺すべきである。余は前に民族の將來に對する心理的條件を述べた中に歡樂を追求し、贅澤に耽ることが、直接には民族を懦弱ならしめ、不道徳に導き、物質尊重主義に傾かしめ、間接には人口減少を招來することを力説した。これは現代文明諸國に於ける一つの通弊であつて、我が國にもその潮流は刻々に押し寄せて來てゐる。我が國でも「武士は食はねど高楊枝」の代りに、「金錢は品性なり」といふ考をもつものが多くなりつゝ、あるのである。

文明の進歩は諸民族間の交通を頻繁にし、箇々人相接する機會を多くするのみならず、印刷物等による思想の傳播を容易ならしめる。その結果、各民族とも新しい習慣、新しい思想、新しい信仰、新しい文藝に接觸する機會が多くなり、在

文明の進歩は諸民族間の交通を頻繁にし、箇々人相接する機會を多くするのみならず、印刷物等による思想の傳播を容易ならしめる。その結果、各民族とも新しい習慣、新しい思想、新しい信仰、新しい文藝に接觸する機會が多くなり、在

來の道徳思想が權威を失ひ、人々の行動がまち／＼になり勝である。これは現代の諸民族が經驗してゐる所で、各國の指導者が、その頭を悩ましつゝ、ある問題である。思想の混亂不統一も、或場合には進歩の階梯となることがあるけれども、それが極端に走つて一民族の傳統を破壊し去る時には、その民族は自滅するのである。我等が外國の文明に接觸する時に最も心しなければならぬのはこの點である。即ち傳統的な中心思想、中心感情は決して見失はないで、外來の思想や感情は、只傳統的なものに磨きをかけ、それを精鍊する材料としてのみ用ゐるべきである。そこで、こゝに少しく外來思想に對する態度について一言しようと思ふ。

由來、人には古いものを棄てて新しいものに就かうとする心の一面がある。その好奇心を満足せしめつゝ、文化の發

達に貢獻する意味で、新しい思想の研究をするのは悪いことではない。すべて思想でも何でも新しいが故に善いといふものではない。これに反して、歴史は尊い。蓋し歴史はその民族に適する思想の發現の迹だからである。同様に風俗習慣、道德、宗教等も亦その民族に適するものの殘存したものである。この明かな事實を無視して、徒らに新を追うて外國の眞似をするのは、決して賢い仕方ではない。曾て澤庵亡國論を唱へた人がある。その考によれば、澤庵のやうな滋養分のない消化の悪い物を食つて居れば國が亡びるといふのである。然るに最近の研究によれば、澤庵にはワイターミンBを多く含んでゐるから、澤庵を益多く食へといふことである。西洋崇拜者の議論にはこの類のものが多し。注意すべきことである。只然し我々の反省しなければならぬことは、

風俗や習慣などの中には、その起る時には相當な理由があつても、時代を經過するに従つて、その理由はとうの昔に消滅して、形ばかりが存續してゐることがあるといふ事實である。その様な場合には、適當な形にこれを改善する必要がある。然し些細な習慣でも、それを變改するときには、その結果として如何なる影響があるかを、先づ考へなければならぬ。況や民族の中心思想に影響を及ぼす如き思想の研究者は、極めて慎重な態度を執らなければならぬ。日本民族の唯一の誇とする忠君愛國の精神、建國の最初から一貫してゐるこの思想は、その根ざす所が極めて深いから、少數の者の變態思想によつて動搖を來すことはない。信ずるけれども、世には附和雷同を事とするものも少なくないから、爲政者と教育家とは大いに注意を拂はなければならぬ。

從來日本人が徒らに外國人の行動を模倣して得々としてゐたことは苦々しいことであるが、それには大いに理由がある。その原因を探して見ると、二つある。その一つは西洋諸國との交通を開いた當時からの情勢であり、他の一つは、日本の文化についての深い研究がなかつたことである。西洋文明の特徴は、主として自然科学の研究とその應用とにある。これらは、眼の前に容易に示されるものである。爲に彼と此との差のあることが解り易い。しかもこれは從來最も日本に缺けた點であつた。それ故に、西洋文明に始めて接觸した吾等の先輩が、日本の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのは無理のないことである。その後自然科学の研究は、その進歩に於て殆ど底止する所がなく、一步否數十歩も後れてゐた日本人は、只單に彼等のやつた迹に追從

して行くだけであつた。これが西洋崇拜の主な原因である。崇拜の結果は、一も二もなく總べて彼等の行動はよいものと考へ、それを模倣すること一日後るれば一日時勢に後れるやうに思つて、茲に模倣の競争といふ珍現象を惹き起したのである。誰も彼も一種の暗示にかゝつて、自己を反省することをしなかつたのである。右のやうな情勢であつたから、その自然の結果として、日本文化に特有なものがあつかをさへ考へるものが少なくなつた。従つて日本文化の精髓の如何なるものであるかについて、はまだ多くの人々はこれを知らない。それは、一つは自然科学の研究を模倣することに較べると著しく困難なことであるにもよるが、一つは一部の人々を除いては、これを探究しようとする心さへも起さなかつたからである。

而してその結果として、傳統的の中心思想をさへ失はうとしたのである。

然し今や西洋文明の正體もほゞ明かになり、心ある人々は内に自ら省みて、日本民族特有の文化を研究しつゝ、しかもそれに囚れず、他方、日本固有の文化に就いて今一層深く研究して、その美點と缺點とを明かにし、東西兩文明の融合に向つて大いに努力しなければならぬ。日本民族の大使命を果さうとするには、それだけの努力を惜しむべきではない。

（日本民族の將來）

改制中等新國文 卷七 終

國文學の系列と作品

一 敘事詩・歴史の系列

一 神話 古事記 日本書紀

二 物語 竹取物語 伊勢物語 大和物語 宇津保物語 落窪物語 源氏物語 狹衣物語 濱松中納言物語 堤中納言物語 住吉物語 取替へばや物語

三 小説 假名草子集 元祿時代小説集 浮世草子集

西鶴文集 八文字屋本集 雨月物語 京傳傑作集 道中膝栗毛 浮世風呂・浮世床 里見八犬傳 馬琴傑作集

四 傳説 古事記 日本書紀 風土記 今昔物語 宇治拾遺物語 古今著聞集 御伽草子 新編御伽草子 榮華物語 大鏡

水鏡 今元物 保治物 平家物語 平家盛衰記 源平盛衰記 吉野拾遺鏡 増野正統記 神皇正統記 太平經記 義經物語 會我物語

二 抒情詩・隨筆の系列

一 長歌 古事記 萬葉集 萱根集 漫吟集 賀茂翁家集 鈴屋集 良寛歌集 近世長歌・今様全集

二 短歌 古事記 萬葉集 古今和歌集 後撰和歌集 拾遺和歌集 後拾遺和歌集 金葉和歌集 詞花和歌集 千載和歌集 新古今和歌集 新勅撰和歌集 續後撰和歌集 續古今和歌集 續拾遺和歌集 新後撰和歌集 玉葉和歌集 續千載和歌集 續後拾遺和歌集 風雅和歌集 新千載和歌集 新拾遺和歌集

新後拾遺和歌集	新續古今和歌集	新葉和歌集	林葉累塵集	和歌鳥の跡	近代諸家集	近世名家集	近代名家歌選	明治初期諸家集	明治名家集	三狂歌	古今夷曲集	萬載狂歌集	德和歌後萬載集	狂歌才藏集	四俳譜	菟玖波集	新菟玖波集	新撰犬筑波集	守武千句	紅梅千句	花月千句	
犬子集	談林十百韻	虛蕉七部集	芭蕉七部集	蕪村七部集	五川柳	時代川柳大觀	新川柳大觀	六隨筆	枕草子	方丈草	十訓抄	徒然草	風俗文選	折焚く柴の記	樂臺雜	駿臺雜	鶉萍雜	雲萍雜	常山紀	玉山勝	花月草	
おらが春	七日記	和泉式部日記	紫式部日記	更級日記	讚岐典侍日記	十六夜日記	辨内侍日記	中務内侍日記	岡部日記	菅笠日記	八紀行	土佐日記	海道行記	東關紀行	野ざらし紀行	鹿島紀行	箕の島小紀行	更科細道	奥の細道	西遊記・東遊記	三戲曲・演舌の系列	
日本書紀	萬葉集	二舞曲	神樂歌	催馬樂	朗吟	和漢朗詠	今樣	安	三謡曲狂言	田狂言	四淨瑠璃	古淨瑠璃及舞の本集	近松門左衛門集	紀海音集	竹田出雲集	近松半二集	淨瑠璃名作集	五脚本	脚本	近松半二集	淨瑠璃名作集	默阿彌全集

解釋法大要

一 解釋の對象

一つの文章を解決するには、それが(一)何について(二)何を(三)どういふ態度で述べてゐるかを分けて考へるのが便である。

一 何について

術語的には「敘述」とか「敘述對象」とか呼ばれてゐる。「櫻が綺麗に咲いてゐます」といふ文章では「櫻」が敘述對象である。文の題目は屢々それである。

二 何を

術語的には「表現」又は「意圖」と呼ばれてゐる。前の「櫻が綺麗に咲いてゐます」といふ文章では「咲いてゐること」又は「綺麗に咲いてゐるといふこと」がそれである。戯曲や小説などで謂ふプロット(Plot)とかテーマ(Theme)とかいふものが屢々それであることが多い。

三 どういふ態度で

何かについて何事かを述べる場合に作者(話者)の情緒が纏つて來て、その主張を強くしその印象を深くするものである。これは通常更に二つに分けて考へられてゐる。

(イ)感情 作者(話者)が敘述對象に對して持つてゐた感情で、前の「櫻が綺麗に咲いてゐます」といふ文章では「綺麗」といふ言葉で表はされてゐるものである。

(ロ)調子 作者(話者)が實在上又は想像上の讀者對者に對して持つてゐた感情で、前の「櫻が綺麗に咲いてゐます」といふ文章では特に何といふ言葉として表れ出てはゐないけれども、全敘述が「平淡な調子」でなされてゐることは語の配りや言葉遣ひから知られる。

二 解釋の種類

一つの文章を解釋するために解釋者の執る態度は、場合により、又その人によつて、全く種々様々であるが、これをその解釋力の源泉に應じて、次のやうに區別することができる。

一 語學的解釋

與へられた文章の内容を明かにするために、各單語については辭書（即ち言語の歴史的知識）により、各語の結合については文法によつて、その全作業を進めて行くやうな場合。

二 心理的解釋

その文章を作つた人の場合になつて見て、作者の種々の個人的事情を、自分の経験に引き較べて、想像して見るやうな場合。

三 歴史的解釋

その文章の作られた時の周囲の状況を背景として、その中に置いて見て説明すること、ある意味からすれば上の二つをふくんでゐる。

解釋の種類について右の三種を分つことは一般に認められてゐることであるが、その名稱は種々異つてゐる場合が多い。

三 解釋の方法

一つの文章を解釋するには、その中の單語の意味や文法にこだはらずに、それらがこの場合どういふ様に用ゐられてゐるかに注意しなければならぬ。即ち、作者の立場になつて見る必要がある。これを更に細かく分け

ていへば、

一 作者の地位を考へること

一つの文章の主語として私とか某とか書き出されてゐなくても、およそ表現には必ずその主體があるものである。その主體である作者が、(一)どういふ時に (二)どういふ所で (三)どういふ事情の下に、そこに書かれてゐる思想を得てそれを表出したものを推究することは、その理解を深くすることになる。

二 先入見を排除すること

文章の解釋には、その中に使用されてゐる語句についてあらかじめ斯ういふ意味であると決めてかゝると思はぬ失敗をすることがある。よくある例では『あはれ』といふのに、現代の用語法で『可哀さう』といふ意味だけを考へて、古い文章に臨んだのでは、それは決して解けないのである。

三 自己を固執しないこと

語句に限らず、敘述の全體についても、そこに述べられてゐるやうな主張なり考へ方なりもありうることを考へて、作者に同情をもつて臨むことは解釋の要諦である。批評はその文章が充分にかつてから後にすべきである。解釋について注意すべきことは其の他澤山あるが、こゝにはその基本的なものだけを擧げた。



大正十年十月廿一日印刷
大正十年十月廿四日發行
昭和四年二月十五日訂正六版印刷
昭和四年二月十八日訂正六版發行
昭和九年十二月三十日訂正七版印刷
昭和九年十二月三十一日訂正七版發行
昭和十年十月十六日訂正八版發行

改制中等新國文 全十冊
定價各冊 金五十八錢

編纂者 故三矢重松
右相續者 三矢夏井
補訂者 鳥野幸次
折口信夫

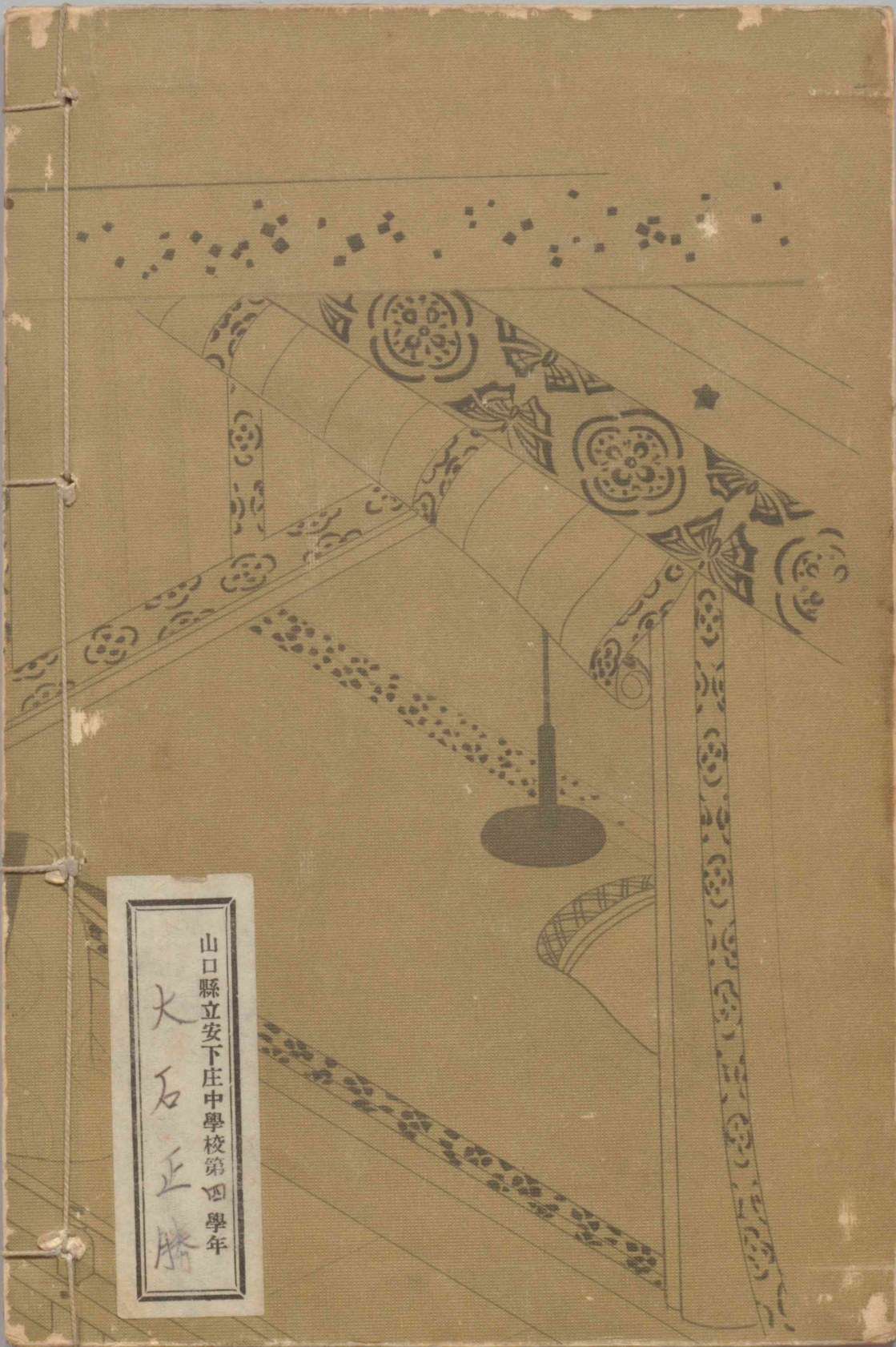
發行所 東京市神田區美土代町十八番地
株式會社 文學社

代表者 小林竹雄

印刷所 東京市本郷區五砂町三十六番地
日東印刷株式會社

發兌 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社

關西一手販賣所 大阪市西區靱北通り二丁目 株式會社 盛文館



山口縣立安下庄中學校第四學年
大石正勝